

富士宮市文化財調査報告書第48集

元富士大宮司館跡Ⅱ

—大宮城跡にかかわる埋蔵文化財発掘調査報告書—

2014

富士宮市教育委員会

富士宮市文化財調査報告書第48集

元富士大宮司館跡Ⅱ

—大宮城跡にかかわる埋蔵文化財発掘調査報告書—

2014

富士宮市教育委員会

例 言

- 1 本書は、静岡県富士宮市元城町1060番4に所在する大宮城跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、富士宮市が計画する療育支援センター建設に伴い、市より調査の依頼を受けた富士宮市教育委員会が実施したものである。
- 3 本調査は、平成24年9月25日から平成25年1月28日まで現地調査を実施し、調査面積はおよそ480㎡となった。同年4月15日から整理作業・報告書作成作業を実施し、平成26年3月31日に事業を完了した。
- 4 本事業の実施体制は、以下のとおりである。

富士宮市教育委員会	教育長	池谷真徳
富士山世界遺産課	課長	渡井一信
＃	主幹兼学術文化財係長	伊藤昌光
＃	主査	保竹貴幸
＃	学芸員	松本将太
＃	嘱託学芸員	馬飼野行雄・細田和代（旧姓今井）・五味奈々子
＃	調査補助員	岩下勉・遠藤俊明・大平美奈子・佐藤法夫・ 園田勝・堤健一・古郡善明・山崎英美子・ 渡井利夫・渡辺成子
＃	整理作業員	佐藤節子・堀内麻美・渡辺真紀子・渡辺麻里
- 5 本書の執筆は、以下のとおりである。

保竹	第1章1
馬飼野	第1章2～第3章、第5章3・4
細田	第4章1・3・4、第5章1・2
五味	第4章2
- 6 写真撮影は、馬飼野が担当した。空中写真撮影は、㈱フジヤマに委託した。
- 7 本事業に関する事務は、富士山世界遺産課が行った。
- 8 本調査に関するすべての資料は、富士宮市教育委員会で保管している。
- 9 本調査の実施にあたっては、次の方々からのご協力を得た。（順不同、敬称略。）

池谷初恵	（伊豆の国市教育委員会）、河合修（静岡県教育委員会）
堀内秀樹	（東京大学埋蔵文化財調査室）
富士宮市保健福祉部	こども未来課・富士宮市都市整備部住宅営繕課
- 10 本書に関わる遺物の鑑定は、下記の方々に依頼した。

池谷初恵	（灰軸陶器・中世国産陶器・貿易陶磁器）
河合修	（灰軸陶器・中世国産陶器・貿易陶磁器）
堀内秀樹	（近世以降の陶磁器・土器類）

目次

第1章	はじめに	
1	調査の経緯と経過	1
2	地理的環境	1
3	歴史的環境	3
第2章	過去の調査で知れた元富士大宮司館跡	
1	富士氏と富士大宮司館	6
2	元富士大宮司館の変遷	8
第3章	発見された遺構	
1	古墳時代の遺構	10
2	居館にかかわる遺構	12
第4章	出土した遺物	
1	古墳時代の遺物	20
2	かわらけ	25
3	中世陶磁器	29
4	その他	33
第5章	まとめ	
1	元富士大宮司館以前について	38
2	遺物からみた元富士大宮司館	38
3	元富士大宮司館IV期（大宮城）の虎口の復元	39
4	おわりに	40

報告書抄録

図版目次

図1	遺跡周辺地質図	2
図2	周辺の遺跡分布図	4
図3	富士地区における弥生時代後期～古墳時代遺跡分布図	5
図4	過去の発掘調査区	7
図5	元富士大宮司館周辺模式図	8
図6	調査全体図	9
図7	竪穴23実測図	11

図 8	竪穴 25・柱列 2 実測図	11
図 9	堀 3 実測図	13
図 10	堀 6 実測図	14
図 11	堀 7 実測図	15
図 12	竪穴 24 礫出土状況図	16
図 13	竪穴 24 実測図	17
図 14	柱列 1 実測図	18
図 15	井戸 3 実測図	19
図 16	古墳時代遺物実測図 1	21
図 17	古墳時代遺物実測図 2	22
図 18	須恵器実測図	24
図 19	かわらけ実測図 1	26
図 20	かわらけ実測図 2	28
図 21	中世陶磁器実測図 1	30
図 22	中世陶磁器実測図 2	31
図 23	近世以降遺物実測図	33
図 24	砥石実測図	34
図 25	銭貨・鉄製品・その他実測図	35
図 26	不明石材実測図	36
図 27	虎口復元図	39
図 28	塀及び土塁の復元図	40

挿表目次

表 1	周辺の遺跡一覧表	4
表 2	中世土器・陶磁器集計表	41
表 3	中世土器・陶磁器の構成割合	41
表 4	中世土器・陶磁器の構成割合(かわらけ除く)	41
表 5	古墳時代遺物観察表	42
表 6	須恵器観察表	43
表 7	かわらけ観察表	44
表 8	中世陶磁器観察表	45
表 9	銭貨観察表	46
表 10	鉄製品・その他観察表	46

写真目次

- 図版 1 1. 遺跡透景／2. 調査区北側（完掘）／3. 調査区南側（完掘）
図版 2 1. 竪穴 23 全景／2. 竪穴 23 カマド／3. 竪穴 25 全景
図版 3 1. 堀 3・6 重複状況／2. 堀 3 全景／3. 堀 6 全景
図版 4 1. 堀 7 全景／2. 竪穴 24 礫出土状況／3. 竪穴 24 完掘
図版 5 1. ビット群／2. 井戸 3／3. 焼土と炭化米散布地
図版 6 1. 古墳時代遺物 1／2. 古墳時代遺物 2／3. 須恵器
図版 7 1. 中世陶磁器／2. 堀 3 出土天目茶碗／3. 瀬戸・美濃産陶器
図版 8 1. かわらけ 1／2. かわらけ 2／3. 砥石
図版 9 1. 鉄製品とその他／2. 銭貨／3. 不明石材 1
図版 10 1. 不明石材 1 のノミ跡／2. 不明石材 3（上から）／3. 不明石材 3（正面）



第1章 はじめに

1. 調査の経緯と経過

大宮城跡は、富士山本宮浅間大社の元大宮司館跡を中心とした遺跡で、範囲内には古墳・奈良・平安時代の生活跡を含んでいる。

本調査の対象地は旧静岡地方方法務局富士宮出張所跡地であり、富士宮市（以下「市」という。）は対象地を購入して療育支援センターを建設するという計画を立てた。対象地が周知の埋蔵文化財包蔵地「大宮城跡」の範囲内であり、周辺から大宮城の堀跡等が発掘されていることから、その取り扱いについて市と富士宮市教育委員会（以下「市教委」という。）との間で協議が行われた。

まず、市から平成24年8月3日付けでボーリング工事に伴う「埋蔵文化財発掘の通知書」が提出され、8月16日付けで静岡県教育委員会（以下「県教委」という。）より工事立会いの実施が通知された。これを受けて、市教委が工事立会いを実施した。

次に、市から8月7日付けで児童福祉施設建設工事に伴う「埋蔵文化財発掘の通知書」が提出されたため、市教委は対象地の状況を把握するために8月27日から29日にかけて確認調査を行い、古墳時代の遺構・遺物と中世の堀跡等を発見した。この結果を受けて、9月12日付けで県教委より本発掘調査の実施が通知され、市より市教委に対し9月14日付けで「埋蔵文化財発掘調査依頼書」が提出された。

発掘調査は市教委が主体となり、9月25日から平成25年1月28日まで現地調査を行った。その結果、大宮城の堀跡や古墳時代の竪穴住居跡等が発掘され、コンテナ3箱分の遺物が出土した。

市教委は出土遺物について、2月7日付けで県教委に「埋蔵文化財保管証」を、2月15日付けで富士宮警察署長宛に「埋蔵物の発見届」を提出し、3月8日付けで富士宮警察署長より、県教委より2月15日付けで埋蔵文化財の認定を受けた旨の通知を受けた。

資料整理作業は、平成25年4月1日から行い、本報告書を刊行し平成26年3月31日の本事業を完了した。

2. 地理的環境

元富士大宮司館跡は、静岡県富士宮市元城町1番1号、同2番2号の旧富士宮市役所跡地と市立大宮小学校校地を中心として存在している。字名は「城山」で、隣接する「蔵屋敷」とともに東西350m、南北250m、面積87,500㎡の長方形区画が『大宮城跡』（遺跡№127・県№33）として登録されている。

今回の対象地は、元城町1番2号（地番・元城町1060番4）の旧法務局富士宮出張所跡地で、旧富士宮市役所の東隣にあたり、元富士大宮司館跡を圍繞する堀の南東隅外側で大宮司館に関わるより、むしろ大宮城の縄張の内として捉えることが妥当といえる場所である。

この地区は、明治9年（1876）の大宮小学校の前身である岳麓洞の建設以前の地籍図をみると田畑で、戦国末期の廃城後は往還沿いの町屋の後背で穀倉地としての土地経営がなされていたと考えられる。岳麓洞は明治中期には大宮尋常小学校と名称を変更し、それとともに講堂、図書館などが整備されていくが、この地が大きく変化するのは昭和7年（1932）4月に起きた「大宮町大火」で神田川東側一帯のおよそ1,200件が焼失した災害復旧により、町役場、警察、銀行、登記所などが再整備されたことによるもので、以来大宮町の文教・行政の中枢地区としてその役割を果たしていた。

しかし、昭和後期のモータリゼーション化の進展や行政サービスの複雑化により公官庁の執務経営

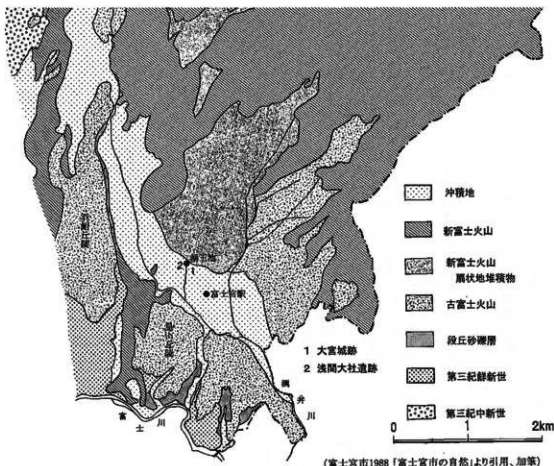


図1 遺跡周辺地質図

にも行きつまりが生じ、平成3年(1991)に富士宮市役所が移転、平成23年(2011)に法務局富士宮出張所が閉所し、市役所跡地には市立大宮保育園が建設され、法務局跡には本調査の起因となった療育支援センター建設が計画されるなど、文教地区として保育から学業への一体化したエリアを目指すことになった。

元富士大宮司館跡の西には、国指定特別天然記念物「湧玉池」(昭和27年3月指定)と流下する神田川を境に富士山本宮浅間大社(以下、浅間大社)が鎮座している。この浅間大社と湧玉池は『浅間大社遺跡』(遺跡No.76・県No.30)として遺跡登録され、平成23年2月に「史跡富士山」に、平成25年6月には「富士山世界文化遺産」の構成資産に認定されている。富士山への信仰形態が今に伝わる資産のひとつに挙げられたもので、考古学成果として11世紀中頃から元富士大宮司館跡と表裏一体の活動が捉えられている。

富士宮市の地質的基盤の大半は富士山の火山活動によるもので、最近では先小御岳・小御岳・古富士・新富士の4火山の積み重ねであることが知られている(図1)。これらの火山にはそれぞれに特徴をもつが、特に古富士火山の泥流は溶岩が火山灰や粘土で固められて極めて不透水性で、反面、新富士火山の溶岩は玄武岩質で粘性が低くクリンカーが生じ易く透水性に富むことが市内各所に数多くの湧水を生む要因となり、前述の「湧玉池」とともに富士山世界文化遺産の構成資産となった国名勝及び天然記念物「白糸ノ滝」(昭和11年9月指定)も有名である。

この新富士火山は17,000～8,000年前に多量の溶岩を噴出し、主な溶岩流は三島溶岩流、芝川溶岩流、大淵溶岩流などで、富士宮市域にも20枚近くの溶岩流が流下し、そのひとつの万野溶岩流がもっとも裾野まで下って先端は浅間大社の後背で「神立山」と称される溶岩台地となり、その底面で「湧

玉池」を湧出し、元富士大宮司館跡北側では比高 20 m ほどの溶岩崖を形成している。この溶岩の表面は縄状の模様となり、頂部にあたる城山公園内の露頭が市指定天然記念物「縄状溶岩」（昭和 44 年 4 月指定）として当時の流下の様子を物語る。

元富士大宮司館は、この地形条件を利用して、中世城館の特徴的配置である、麓に居館、後背の高台に砦城を築いたであろうことも問われるが、今現在で考古・文書などに遺構の有無を知る資料は見出されていない。

また、「大宮城」化した城構えを考えると、大宮の地は西から南を潤井川、北を風祭川、東を弓沢川に囲まれた東西 3 km、南北 4 km の広がり土地で、潤井川は大宮層を下って湿地帯を伴い、風祭川・弓沢川は新富士の火山性砂礫層を侵食して深く険しい浸食崖を作り、自ずと「総堀」効果を生んでいる。さらに富士山の緩斜面が下る東北側には 600 m 向かった場所に幅 6 m で土塁と薬研堀が築かれ、隣接する字名「榊杭」は逆茂木などを配置した名残ともいわれる。

元富士大宮司館跡の基盤は、古富士泥流を新富士の火山性扇状地の砂礫層が覆った西向きの斜面で、居館の中心である大宮小校庭で標高 122.4 m、そこから神田川に向けて下り湧玉池河岸で標高 116.4 m を測る。この傾斜が必然的に階段上に曲輪を拡張する結果ともなり、居館の北側の溶岩崖との間に出来た幅 30 m ほどの窪地は湧水を伴って「城池」の残形とも伝わり、東から南側は地形変化のない斜面を掘削して堀と土塁を巡らして、新富士火山砂礫を掘り抜いた堀底から染み出る湧水を利用するなど巧みな縄張を配している。

なお、元富士大宮司館跡構築以前には、『静岡縣史』（1930）に記されるように、「湧玉池の東側台地及びその付近に・・・、果たして縄文式土器の散布もあるが、多量の弥生式土器が見え、須恵器も混入している。」とあり、中野國雄『吉原周辺の原始時代』（1954）で「北神田遺跡」と命名され、弥生遺跡として紹介されている。

3. 歴史的環境

元富士大宮司館跡（1）は、昭和 59 年に北神田遺跡内に新発見され、現遺跡地名表では「大宮城跡」に包括されている（図 3）。

まずは、静岡縣史で紹介された北神田遺跡にかかわる歴史的環境をみていきたい。それによると、前述するように少量の縄文土器の出土が伝わるが、今回まで 5 次にわたる発掘調査では資料を得ていない。神田川対岸の浅間大社遺跡（2）では神社南西で縄文早期粕畑式土器が採取された記録があるが、過去 7 次の発掘調査や湧玉池浚渫事業では確認されていない。縄文早期遺跡の狭い居住圏のあり方に起因するのであろうか、いずれにしてもこの地域特有の縄文中後期の爆発的な遺跡増加においても遺跡が確認されない地域である。

前述するように現状の資料で北神田遺跡の営みが開始されるのは弥生末から古墳初頭で、この地域では縄文中後期に匹敵するような遺跡の増加がみられる時期であり、潤井川湿地帯の縁辺にはおよそ 500 m 置きに 50 近い遺跡の占有をみる。詳細には羽船・星山丘陵の台地先端を占有する一群と、本遺跡を含む潤井川東岸の新富士火山扇状地形先端を占有する一群、さらに富士根地区の古富士泥流を基盤とする一群を認めることができる。

弥生中期の富士市山王遺跡・別所遺跡・渋沢遺跡のあり方から富士川→沼久保谷→潤井川の弥生文化伝播ルートが唱えられて久しいが、弥生後期に至って先ず、別所遺跡の下段で潤井川湿地帯にせり出す舌状台地に滝戸遺跡（6）、星山谷南岸に月の輪上遺跡（11）、潤井川東岸の自然堤防上に泉遺跡（5）、富士山から下る低丘陵末端に石敷遺跡（19）など、それぞれの群のなかに主導的な遺跡が現れていく。



図2 周辺の遺跡分布図

表1 周辺の遺跡一覧表

No.	遺跡名	時代	標高	種別	遺構・遺物
72	琴平遺跡	弥生、古墳	144	散布	土器
76	浅間大社遺跡	縄文(早)、古墳、古代、平安、中世、近世	120	散布・社寺	堀跡、土器、石器、木製品、金属器、陶磁器
77	羽衣町遺跡	縄文、弥生(後)、古墳(前)	115	散布	土器
78	城山遺跡	古墳(前～後)、中世	150	散布	土器、陶磁器
80	二ノ宮遺跡	古墳(前～後)、奈良	142	散布	土器
83	貴船町遺跡	弥生、古墳(前～後)、奈良	120	散布・集落	土器
82	西町遺跡	弥生(後)、古墳(前)	120	散布・集落	土器
105	泉遺跡	縄文(後)、弥生(後)、古墳、平安、近世	125	散布・集落	土器、石製品、銅剣、銅鏃、庄内甕
127	大富城跡	古墳、奈良、平安、中世、近世	130	散布・集落・城跡	土器、土製品、石製品、木製品、金属器、陶磁器
137	若ノ宮遺跡	古墳(前～後)、中世	140	散布	土器、陶磁器
191	運雀町遺跡	弥生、古墳	130	散布	土器

さらに弥生終末にかけて遺跡は活発化し、南部谷戸遺跡(8)・下ヶ谷戸遺跡(12)、羽衣町遺跡、上石敷遺跡(18)・丸ヶ谷戸遺跡(13)などが進出し、丸ヶ谷戸遺跡では全長26mの前方後方形周溝墓を築くまでに発達し、これを契機として、古墳初頭における「S字状口縁台付甕」の文化の受容は最たるものとなり、月の輪平遺跡(10)・月の輪下遺跡(9)・野中向原遺跡(7)、浅間大社遺跡・貴船町遺跡(3)・東田遺跡(4)、峯石遺跡(14)・三ツ室遺跡(15)・神祖遺跡(16)・権現遺跡(20)・若宮遺跡(21)・富士市日間沢遺跡(22)など周辺に拡大していく。おそらく本遺跡もこの盛隆期に新富士の火山性扇状地の先端に浅間大社遺跡・貴船町遺跡・東田遺跡とともに発生したものであろうが、以後、月の輪平遺跡、月の輪下遺跡など星山丘陵に僅かな継続性をみるものの市内の大半の遺跡が急激に衰退して潤井川湿地帯縁辺から遺跡が姿を消してしまう状況のなかで、それらと消長をともにした遺跡であったものと思われる。

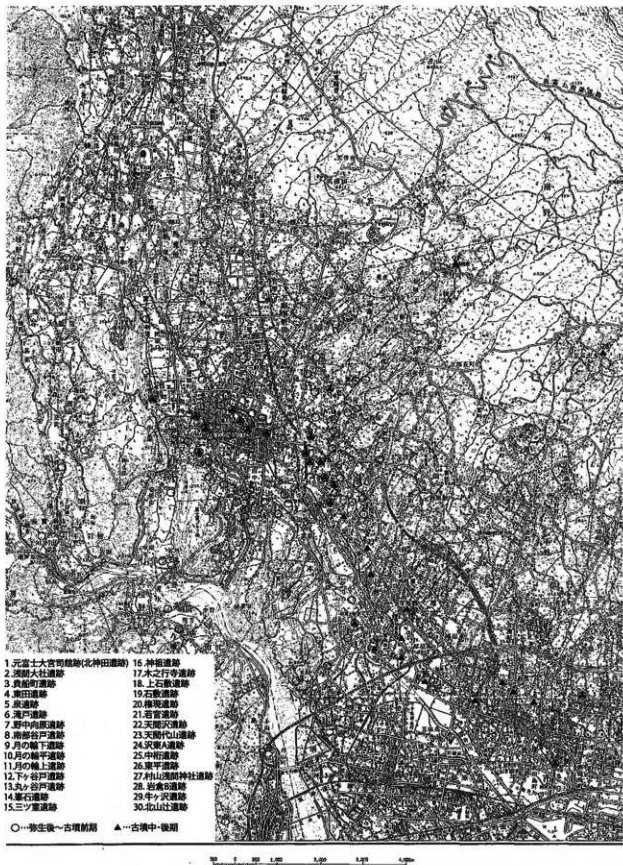


図3 富士地区における弥生時代後期～古墳時代遺跡分布図

北神田遺跡の再登場は5世紀中頃で、浅間大社遺跡とともに初期須恵器をみるが、浅間大社遺跡はこれ以降、11世紀中頃まで活動がはつきりせず、依然として古墳前期終末から続く地域の閉塞感は拭えない。以後、5世紀後半から6世紀を迎えると本遺跡の周辺にかつての占有地を求めて遺跡が定着を始め、泉遺跡や貴船町遺跡、木ノ行寺遺跡(17)、さらに後半には東田遺跡が加わるなど、泉遺跡が占有する潤井川東岸の自然堤防上から新富士の火山性扇状地先端、さらには古富士泥流を基盤とする富士根小泉地区にいたる富士山側の緩い丘陵に遺跡が連なって活動を再開し、さらには潤井川の扇状地東岸の微高地に富士市沢東A遺跡(24)が進出していく。反面、かつて隆盛を極めた星山丘陵からは遺跡が撤退し、市内唯一の前方後円墳とされる滝戸1号墳を盟主にする滝戸古墳群や、別所古墳群などが築かれて景観が大きく変化していく。これは木ノ行寺遺跡に水利施設の「溜井」が築かれるなど、富士山側の広域な裾野が開発の対象となったためともいわれる。

なお、この相対関係は富士市沢東遺跡群と潤井川対岸の星山丘陵南端の岩本山丘陵を占有する富士市滝戸原古墳群、鎌研古墳群などのあり方からも看取できる。

以後、7世紀後半から8世紀、奈良から平安初期にかけて富士山側の丘陵先端部の開発はさらに進展して、上石敷遺跡、石敷遺跡、権現遺跡など旧来の占有地から峯石遺跡や富士市天間代山遺跡(23)など新規の占有も目立ち、富士市沢東A遺跡から潤井川扇状地の東縁をたどって、沢東B遺跡、中桁遺跡などが続き、ついには最先端で駿河湾を望む広い緩斜面に富士郡衙の東平遺跡(26)が形成されるに至る。

この時、北神田遺跡は泉遺跡、貴船町遺跡、東田遺跡とともに衰退のなかにあり、貴船町遺跡や東田遺跡はそのまま消滅し、泉遺跡が9世紀に活動を再開するものの、地域全体では9世紀後半に富士山中の標高500m地点に村山浅間神社遺跡(27)、等高線を南東へ4kmたどった地点に富士市岩倉B遺跡(28)、10世紀前半に潤井川を北上した羽鉾丘陵下段に牛ヶ沢遺跡(29)など山間地域に小規模遺跡を散見するにとどまってしまう。富士山の3大噴火とされる「延暦19年(800)」、「貞観6年(864)」の大噴火の時期でもある。

以後、北神田遺跡では10世紀後半の灰釉陶器のわずかな資料を得るが、本格的な再開は11世紀後半に掘立柱建物を林立した富士大宮司館の祖形が築かれた時からとなる。

第2章 過去の調査から知れた元富士大宮司館跡

1. 富士氏と富士大宮司館

元富士大宮司館跡の当主である富士大宮司家は、江戸時代に整理された『大宮司富士氏系図』などによると、延暦14年(795)5代孝昭天皇を祖とする和運部豊麿が駿河国富士郡大領を拝して以来、富士郡司から大宮司への系譜を得て、弘化2年(1845)の44代富士重本の就任を経て明治に至るまで駿河国富士浅間宮(現富士山本宮浅間大社)の大宮司職であったことが伝わっている。

その居館は、昭和初期にかつての浅間神社の屋敷配置を描いた『旧神社社僧屋敷跡図』に浅間大社西側の高台(現市民文化会館)に記され、跡地に建つ芙蓉館碑に「芙蓉館は、駿河富士郡大宮の郷に在り、富士氏累世之に居る。・・・原壁壘溝塹有り、宛ら城郭を成せり。所謂大宮城の郭なり。・・・」とあり、この居館跡が富士氏累代の地で大宮城にかかわるという認識が長い間地域史のなかに浸透していた。

この状況のなかで、昭和59年(1984)に大宮小学校体育館建設予定地より、11世紀後半から16世紀後半まで連続と営まれた居館跡の一部が発見され、さらに平成7年(1995)の防火水槽設置、平

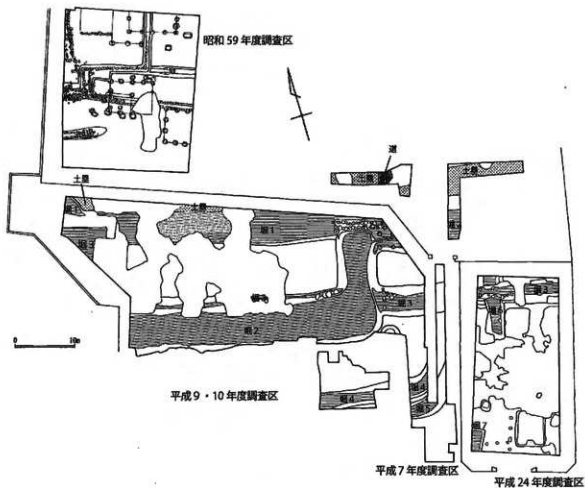


図4 過去の発掘調査区

成8・9年(1996・1997)の旧市役所解体工事によって居館跡に伴う幾条の堀と古墳時代集落跡を発見するに至り、これが芙蓉館以前の「富士大宮司館跡」であり、大規模な堀の改修の跡は「大宮城」にかかわるものと判断されたのである(図4)。

富士氏が郡司を担った富士郡衙は、大型の掘立柱建物や、「布自」、「厨」、「寺」などの墨書土器の発見から富士市東平遺跡一帯とされ、10世紀後半に富士郡衙が衰退していくなか11世紀後半になると湧玉池の縁辺で浅間大社遺跡に祭祀施設が整えられ、東隣には元富士大宮司館跡が築かれることなどから、富士氏が郡司政務を離れ富士山の災異鎮祭にかかる祭務を司る条件が整い、ここで政教一致の組織を再建していったものとされる。

文献資料に富士氏や大宮司館が初見されるのは、大宮司富士氏文書の元弘3年(1333)と建武元年(1334)の後醍醐天皇の繪旨2通で、その宛名に「富士大宮司館」、「大宮司館」が記され、建武2年(1335)には足利尊氏と弟の直義の「富士浅間宮」への寄進文書もみる。これは建武中興の政変後の南朝と北朝による寄進合戦であり、富士浅間宮への宗教的な権威に対する敬神の披瀝でもあるが、観応2年・正平6年(1351)には守護代上杉憲将に街道警護を依頼されるような武力勢力を蓄え始めた富士大宮司を自陣に取り込もうとする策略もあったものと思われる。

さらに、受給者が富士大宮司や大宮司といった抽象的な文言から、具体的な受給者の名前が記されたものが、応永16年(1409)の「道仁祢原關所充行状」の「富士長永」で、根原の関の諸權益を与えるというものであるが、ここに至って具体名が記されるまでに富士氏の在地領主権が確立していたことも予想される。

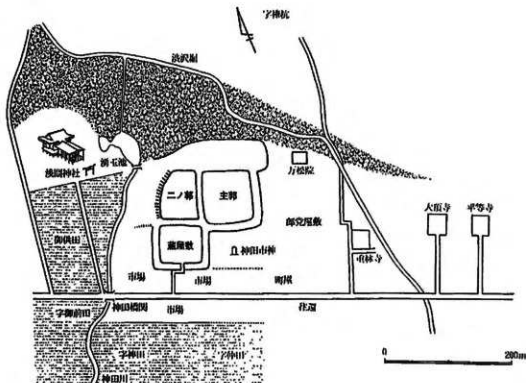


図5 元富士大宮司館周辺模式図

2. 元富士大宮司館の変遷

元富士大宮司館跡が富士浅間宮と神田川を挟んだ東の高台に掘立建物群を築いた11世紀後半には、富士浅間宮は幅5mほどの堀によって圍繞される祭祀施設を整え、以来13世紀前半まで多量の舶載陶磁器やかわらけを出土して優勢な祭務経営を成していたが、13世紀後半から14世紀を境にして元富士大宮司館跡で富士浅間宮の厚手のかわらけと異なる薄手のかわらけや陶磁器類の出土が多くなり、威信財や日常什器を併せて遺物の出土量が逆転していく。時期的には貞応2年(1223)執権北条義時の社殿の造営運営が執り行われた後、文永2年(1265)に富士郡上方上野郷に南条時光が、さらに北山重須郷に石川孫三郎が地頭に補任されるなど中世鎌倉の政治支配が顕著な時であるが、富士郡の中核である大宮の地に1町(およそ109m)の方形居館を構えるに至った富士氏は少なくとも幕府御家人と対等の政治的権威をも確立していたものと思われる。

このように方形居館を構えた富士氏は前述するように建武の中興(1334)の時には「富士大宮司館」・「大宮司館」と称されるまでに存在感を増し、さらに14世紀から15世紀に至ると富士山北条関連遺跡に匹敵するほどの舶載陶磁器などの威信財を得るまでに在地領主権を増長させ、永享5年(1433)には今川氏の内紛、同7年(1435)には関東公方足利持氏による常陸国長倉城の攻略に参加するなど武闘集団としての地位も確固たるものとしていくのである。

その後、富士大宮司館は西に「二ノ廓」を連結し、その南に「兵糧廊」を設け、吉原から甲州への往還から折れをもって進入路とするなど、縄張を拡張していったことが、城山や蔵屋敷といった字名や地籍図などから描かれる(図5)。また、神田川の往還沿いには永禄9年(1566)に今川氏真から大宮六度市を楽市として認められるなど地域経済活動の繁栄にも助力しているが、戦国の時世のなかで永禄4年(1561)に氏真が30代富士信忠に宛てた文書に「當城普請」とあるように、二重、三重に堀を巡らして防衛強化を図っていくことになるのである。

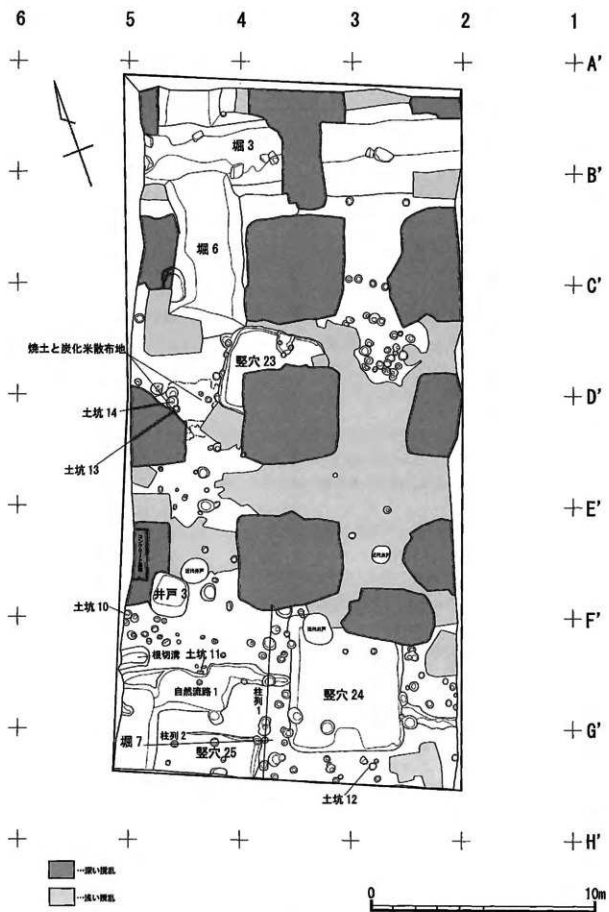


図6 調査全体図

以上のように富士大宮司館は中世居館から永禄12年氏真発給文書にみえる「大宮城」化を果たすのであるが、八王子城主北条氏照曰く「屋敷同前（然）之地」であり、元亀2年（1571）氏真の感状によれば、武田信玄の侵略を永禄11年（1568）12月9日に「駿・甲之境錯乱」、翌12年（1569）2月朔日に「穴山・葛山方為始、大宮城江離成動」、同12年6月23日に「信玄以大軍彼城江取懸、昼夜廿日費」と三度の応酬に耐えることができず、抗戦むなしく武田方に城を明け渡すことになる。その後、元亀2年（1571）に31代富士藏人信通は武装を解き氏真に暇を請い、今川・北条から中立化を図るが、信玄は東海道筋に至る領土経営の重要性から富士浅間宮への庇護を約束し、信通の父信忠は甲州に参上し武田の被官となるのである。

武田氏の領土化に至り、元亀元年（1570）開城された大宮城は家臣の原昌胤が富士浅間宮社人の一和尚清長らを転居させるなどして大規模な堀の改修を行い、最大規模の大宮城を完成する。さらに、信玄の嫡子勝頼は天正4年（1576）富士浅間宮の造営を始めて天正6年（1578）5月に遷宮する。しかし、この大宮城も天正10年（1582）3月の「天目山の戦い」による武田氏滅亡とともに富士浅間宮ともども北条方により焼亡してその歴史を閉じる。以後、富士氏は慶長11年（1606）徳川家康によって再建された浅間宮とともに生活空間を西側高台、前述する芙蓉館跡の建立地に移し、江戸幕府寺社奉行統制下で祭務に専念することになるのである。

第3章 発見された遺構

発掘調査箇所は、旧法務局富士宮出張所跡地の712.06㎡が対象とされたが、対象地が攪拌造成土であり掘削深度が2mを超えることから安全対策上、東西15m、南北32mの約480㎡を対象とした。しかも調査区内には建造物の基礎設置穴や整地跡がひろがり、およそ2分の1が攪乱されている状態であった（図6）。

発見された遺構は、（遺構番号は1次調査より通し番号）

（古墳時代の遺構）	堅穴 23・堅穴 25	計 2 遺構
（居館にかかわる遺構）	堀 3・堀 6・堀 7・堅穴 24・柱列 1・柱列 2・井戸 3 土坑 10～14・焼土と炭化米散布地	計 13 遺構

の計 15 遺構である。

なお、近世以降の畑の根切溝や、自然流路もみられる。

1. 古墳時代の遺構

堅穴 23（図7）

古墳時代後期の堅穴住居で、調査区中央で堀6に壁の北西隅を若干削取されて検出され、南西に15mほどいって同時期の堅穴1～3の重複住居をみる。住居の南東2分の1ほどと北壁上部を後世の攪乱で欠き、残存部の計測値は南北4.05m、東西4.25mの横長の隅丸方形で、主軸をN-30°-Eに向ける。西壁で高さ0.44mを測り、壁柱と思われる径0.4mの小穴4穴が壁中段まで穿たれている。

底面に円形の硬化面があり同一の性格をもつものと思われるが、北から東の壁の上半が削取されていて確認できない。壁沿いには幅0.2mほどの壁溝がめぐる。床面の標高は121.23mを測り、しまりも良い。主柱穴ははっきりせず、カマド前のピットは後世の重複である。

カマドは北壁中央やや東寄りに築かれ、幅1.50×奥行0.5m、厚さ0.1mで緩いC字状となって崩れ落ち、弧状の内側に径0.5mほどの範囲に硬化した焼土が残っている。カマド下部には幅0.7、奥

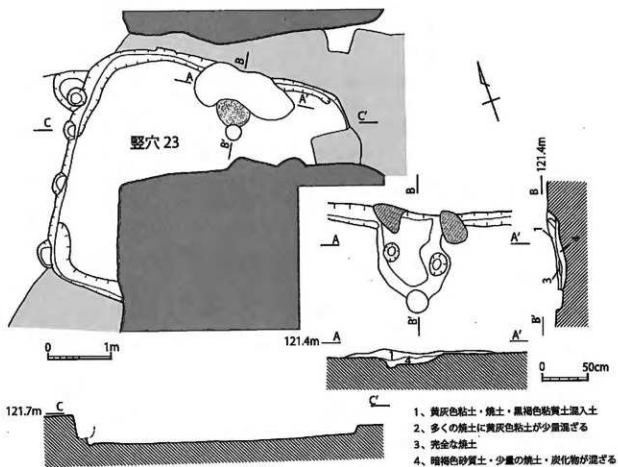


図7 竪穴 23 実測図

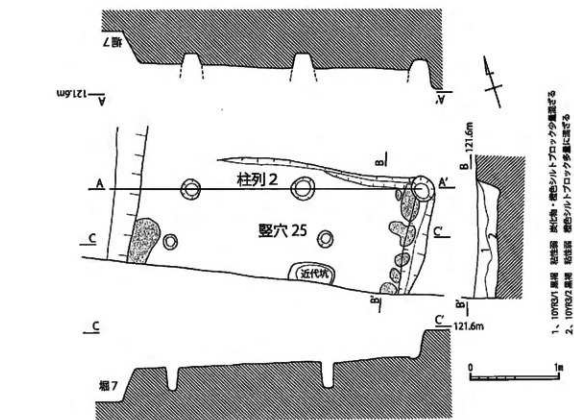


図8 竪穴 25・柱列 2 実測図

行 0.85、深さ 0.10 m の掘方があり、両袖部に椀状の窪みが穿たれている。

竪穴 25 (図 8)

古墳時代中期の竪穴住居で、調査区南西隅で堀 7 に西壁と床面の一部を削取されて検出される。西に 6 m ほどいくと竪穴 5・6・7 などが、さらに西に続いて同時期の竪穴住居が激しく重複している。壁際や床面に焼土がみられる被火災住居で、前回調査では竪穴 8・10・11・15 が被火災で、本竪穴から北西に 20 m ほどいくと竪穴 10、さらに同じ間隔で竪穴 8 が弧状に位置している。住居の南半は調査区外で形状ははっきりしないが、残る東西長はおよそ 5.0 m で方形の形状が予想される。床面は西側に緩く低くなり、中央で標高 121.24 m を測る。壁面は東壁で高さ 0.32 m が残り、壁沿いには幅 0.2 m ほどの浅い壁溝がめぐる。主柱穴は径 0.25 m ほどで深くはっきりした 2 本が 2.5 m の間隔で穿たれている。今は調査区内では確認されない。

なお、北壁沿いに並行して居館にかかわる柱列 2 が重複している。

2. 居館にかかわる遺構

堀 3 (図 9)

堀 3 は、元富士大宮司館Ⅲ期に防衛強化のために堀 1 から 10 m 外側に築かれた堀で、上幅 5.0 m、底幅 2.5 m、深さ 2.0 m、壁立ち上り角 50°、構築方位 N-77°-W、底面標高 119.95 m (以下、同順の標記) の規模と、武田氏改修時に虎口を築くため巨礫を詰めて平地化されたことが知られている。

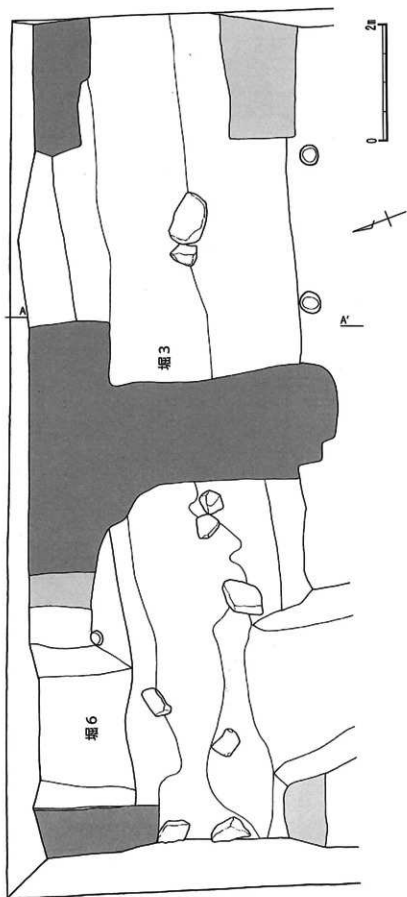
今回は調査区北側でその延長を直線で 14 m ほどを検出した。調査区西隅で新たに築かれた堀 6 に直交して切られている。規模は 4.5 m、1.8 m、1.7 m、50°、N-77°-W、120.07 m で、遺構上部を攪乱で欠くため数値は若干下回る。堀底には 0.5~1.0 m ほどの巨礫が落ち込み (表記より実際には多く礫があり、堀 6 との直行する堀底には土止め用と思われる礫が並んでいたことを確認している)、数箇所からの湧水が堀底や壁面を浸食してジグザグしたラインが描かれるが、基本的には 2 次調査で知れたように掘削自体が荒く、急拵えの感がぬぐえない。土層断面には土塁側からの構築土が徐々に崩落していった後、一気に埋め戻された様子がみてとれる。

堀 6 (図 10)

堀 6 は、調査区の北西隅で堀 3 を直交して切り、南に向かって 11 m が確認される。規模は上幅 3.5 m、底幅 2.0 m、深さ 1.2 m、壁立ち上り角 60°、構築方位 N-18°-E、底面標高 120.40 m で、堀 3 より一回り小振りで、堀底も 0.2 m ほど高い。従って水脈に至るまで掘削は及んでいない。堀の掘削は丁寧で鋭角的なラインを築き、とくに南壁は箱状にはっきりと整形されている。堀底も平滑で礫の遺存もない (表記は地山礫)。埋土には壁面にそって底面近くまで帯状となって周囲から一様に流れ込む灰色粘土系攪拌土があり、堀の掘削から近い時期に流れ込んだものであろうが特徴的である。

堀 7 (図 11)

堀 7 は、調査区の南西隅で竪穴 25 の西側 5 分の 1 を切り、北壁沿いを東から西に下る自然流路 (田畑境の畝が雨水で浸食されて流路化したもの) に削られている。南端から北へおよそ 3.60 m、西端から東へ 1.9 m が確認されたが西壁が調査区外で全容は知れず、確認される範囲で深さ 1.3 m、壁立ち上り角 61°、構築方位 N-20°-W、底面標高 120.55 m を測る。堀の掘削は堀 6 と同様で鋭角的であり、堀底も平滑で礫などの残存もなく類似点は多い。また、前回調査の堀 5 と同規模、形態や底面標高が



- 1、田舎土層
- 2、1078A/3 にぶい家床 粘性土 しまりやや弱 1~3cm 程度の小塊を含む
- 3、1078B/2 灰家床 粘性やや弱 しまり弱 2cm 程度のぶい、黄褐色シルトブロック混ざる
- 4、1078A/2 灰家床 粘性弱 1~20cm 程度の塊多量を含む
- 5、1078A/3 にぶい家床 粘性やや弱
- 6、1078B/3 にぶい家床 粘性弱 0.5cm 程度の塊土が混ざる
- 7、1078A/2 灰家床 粘性強 礫大の塊わずかに含む
- 8、1078A/2 灰家床 粘性やや弱 5~10cm 程度の塊多量を含む
- 9、1078A/2 灰家床 粘性強 しまり強

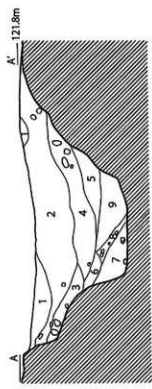


図9 掘3実測図

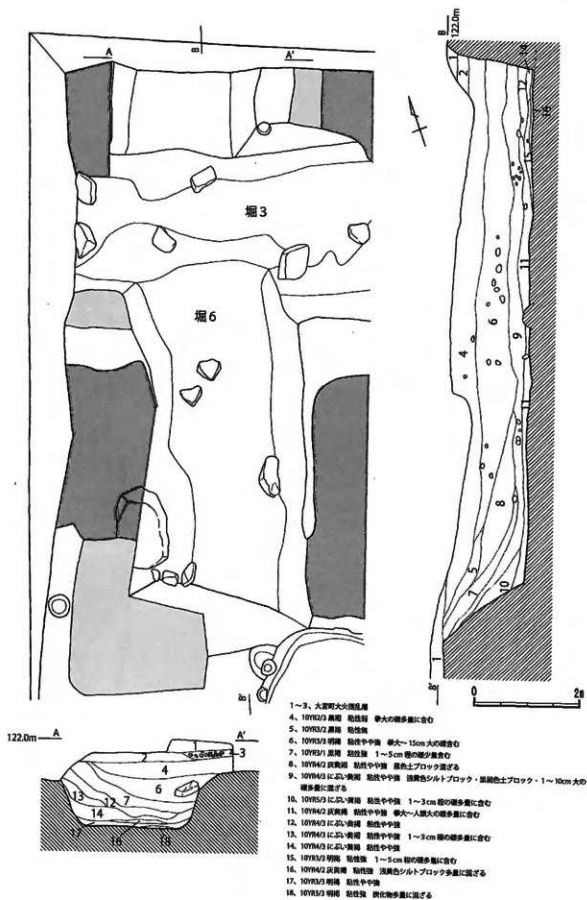


図10 堀6実測図

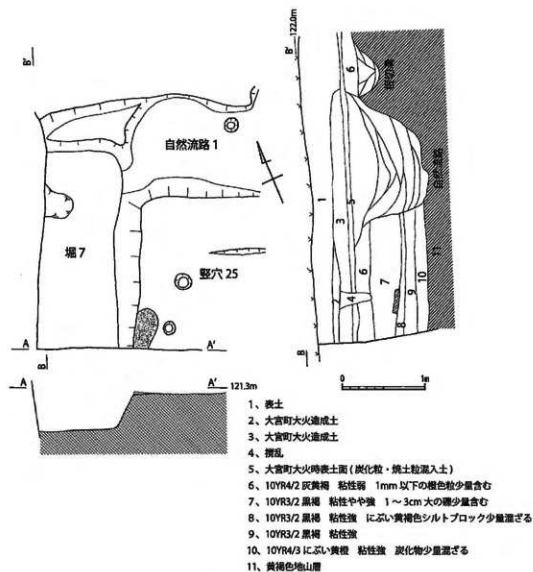


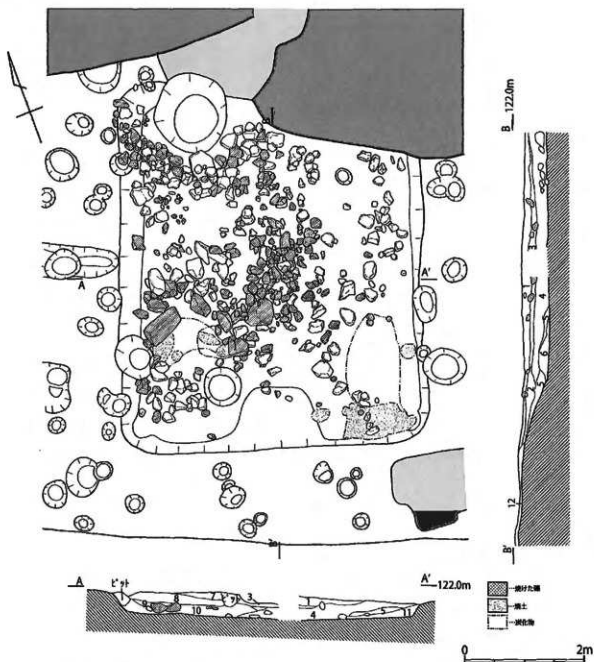
図 11 堀 7 実測図

120.40 m で類似し、同時の構築である可能性は高い。

竪穴 24 (図 13)

竪穴 24 は、元富士大宮司館Ⅲ期に防衛強化のために築かれた堀 3 と同期と考えられる竪穴で、堀 3 からおよそ 20 m 南に築かれている。北壁を造成工事と近代井戸の掘削によって欠くがほぼ全体が残っているといえる。形状は南北に長い緩い隅丸方形で、南北 6.25 m、東西 5.05 m、主軸方位 N-22°-E、床面の標高は 121.47 m を測る。壁は 0.4 m ほどで緩く立ち上り、床面も中央が若干窪む皿状を呈している。南壁中央には幅 1.3 m、長さ 1.0 m ほどの緩いスロープで入口が築かれ、南壁の東西隅に浅い円形の窪みを見るが北壁西隅に同様の敷設痕がなく、現状では柱穴に判断されない。また、床面北側の 2 穴も柱穴には不向きで、主柱穴を持たない構造も予想されるが、壁外側のピット群に竪穴外柱穴を想定するだけの規則性は見いだせない。

竪穴内には 469 個の角礫 (10 ~ 20cm を主体に、40cm 内外の巨礫も含む。被熱礫 237 個) が床面から厚さ 0.4 m の埋土に万遍なく含まれて、竪穴の北東から中央にかけて多くが廃棄され、その上面は黄灰色粘土と焼土の混入土で覆われていた (図 12)。また、床面の南側一帯には焼土・炭化物がひろ



- 1、10YR4/2 灰黄褐 粘性無 炭化物わずかに混ざる
- 2、10YR4/3 にぶい黄橙 粘性無 炭化物わずかに混ざる
- 3、10YR4/3 にぶい黄橙 粘性無 橙色焼土、炭化物、10～15cm 大の礫多量に含む
- 4、10YR3/2 黒褐 粘性無 炭化物、3～20cm 大の礫少量含む
- 5、10YR3/2 黒褐 粘性無 炭化物、橙色シルトブロック多量に含む
- 6、10YR3/1 黒褐 粘性無 炭化物多量に混ざる
- 7、10YR4/2 灰黄褐 粘性無 灰黄色粘土、橙色焼土、炭化物多量に混ざる
- 8、10YR4/2 灰黄褐 粘性無 灰黄色粘土、橙色焼土、炭化物少量混ざり、1～3cm 大の礫少量含む
- 9、10YR4/2 灰黄褐 粘性無 炭化物少量混ざる
- 10、10YR4/2 灰黄褐 粘性無 炭化物、橙色焼土ブロック多量に混じり、10cm～人頭大の礫多量に含む
- 11、10YR3/2 黒褐 粘性無 炭化物、1～3cm 大の礫多量に含む
- 12、黄褐色地山層

図 12 竪穴 24 礫出土状況図

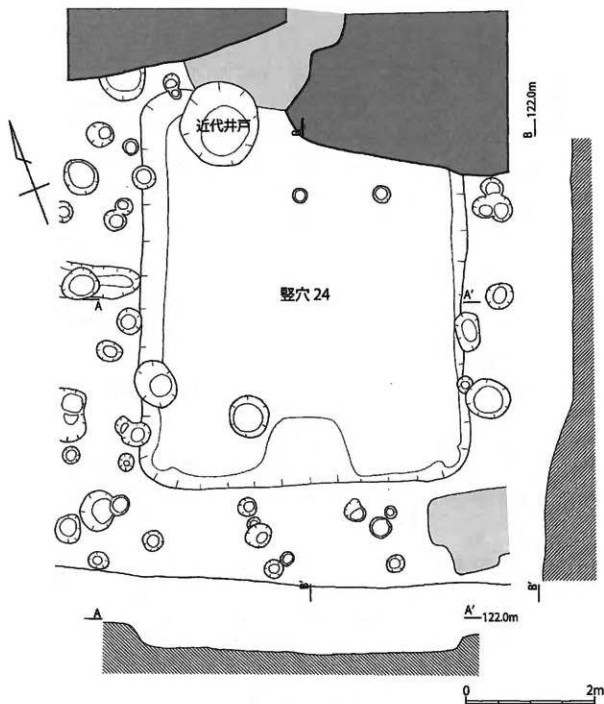


図 13 竪穴 24 実測図

がり、意図的な燃焼行為も感じられた。廃棄礫のなかには角柱化された3個の巨礫があり、そのうちの不明石材2・3(図26)は被熱のうえ箱状の窪みが穿たれて、強力な火気使用の用材と考えられるが、竪穴にそれらしき敷設痕は見当たらなかった。おそらく火にかかわった工房跡であろうが、短時間の竪穴内への廃棄行為は堀3と消長を合わせたものと思われる。

柱列

調査区には0.4m内外を主体にした110基以上のピットが穿たれていたが、激しい攪乱のなかで企画性がうかがわれた柱列は2基である。

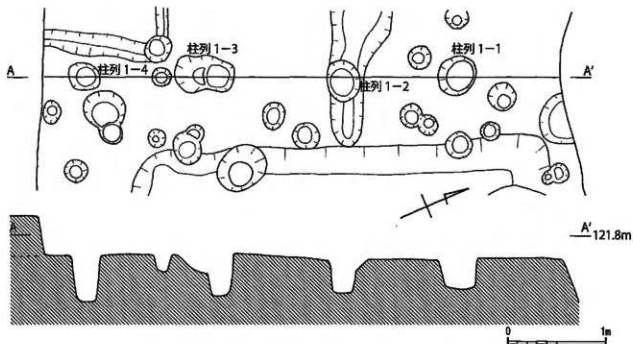


図 14 柱列 1 実測図

柱列 1 (図 14)

柱列 1 は、調査区南端から $N-21^{\circ}-E$ を主軸に直列して 4 穴が確認されるが、北側は 10 m 過ぎまで攪乱が続き延長は知れない。竪穴 24 の埋戻し後、元富士大宮司館 IV 期の大宮城にかかわって築かれた柵列としてみたい。柱穴はほぼ円形で径 0.5 m 内外、深さ 0.5 ~ 0.7 m を測り、周囲のピットとは歴然とした違いが感じられる。柱間は南から 1.85 - 1.8 - 1.75 m を測る。

柱列 2 (図 8)

柱列 2 は、竪穴 25 の北壁沿いに $N-74^{\circ}-W$ を主軸にして 3 穴が確認される。柱穴は円形で径 0.4 m ほど、深さは 0.5 m 強と周辺ピットに比べて深い。柱間は東から 1.85 - 1.8 m を測るが、それより西は堀 7 に切られて不明である。堀 3 と同方向に築かれるなど元富士大宮司館 III 期の堀の増強時に敷設された柵列と考えられる。

土坑

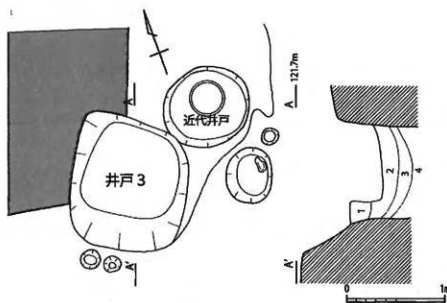
前述する 110 基以上のピットのなかで、遺物を内包する遺構を土坑として取り上げる。

土坑 10 (図 6)

土坑 10 は、井戸 3 から西に 1 m のところに穿たれている。西壁を調査区外におくが、円形で径 0.4 m ほどを測り、深さは 0.14 m の碗状を呈している。周囲には 12 基のピットが散在するが、本坑より小振りなことから柱穴的であり性格の違いが窺える。埋土は自然流路同様の砂利層で出土するかわりけ片など (図 19 - 28・29) の摩耗も著しく、居館にかかわる遺構群のなかでは後出のものと思われる。

土坑 11 (図 6)

土坑 11 は、土坑 10 の東南にひろがるピット群の南端で自然流路に南半を削取されている。径 0.45 m



- 1、掘乱土
- 2、7SYR4/1 灰 粘性強 褐色シルトブロックが混ざり、2～5mの砂礫少量含む
- 3、10YR4/1 褐灰 粘性強 1mm程の褐色砂粒を多量に含む
- 4、10YR3/1 黒褐 粘性強 シルト

図15 井戸3実測図

ほどの円形で深さは0.5mである。須恵器片が出土し、堅穴25との関連がうかがえるが、間を自然流路がひろく浸食して、遺構の追及はならない。また、本坑の北東側一帯には細かな砂粒が多く含まれる黒色系の流入土が堆積し、鉄鏃(図17-49)、管玉(図17-50)が出土している。

土坑12(図6)

土坑12は、堅穴24の南壁から0.6m離れて穿たれた、径0.35m、深さ0.3mの円柱状の土坑で、刀子と思われる板状の鉄製品(図25-11)が出土している。

土坑13(図6)

土坑13は、堅穴23の南西隅から0.5m離れて穿たれた、径0.3m、深さ0.2mの腕状の浅い土坑で、常滑壺の破片(図22-36)が出土している。

土坑14(図6)

土坑14は、焼土と炭化米散布地に重複して穿たれた、径0.55m、深さ0.3mの腕状の土坑で、鉄釘(図25-7)が出土している。

井戸3(図15)

井戸3は、調査区の西側南寄り、堀7の4mほど北で確認された。歪んだ隅丸方形の素掘りの井戸で、南北1.9m、東西1.7m、深さ1.5m以上である。

前回調査で堀3の南に径3.5mほどの円形素掘り井戸、郭内に1.0m強の方形素掘り井戸が確認されているが、形状はさまざまである。

焼土と炭化米散布地(図6)

焼土が、堀6から南へ2mの平地に3.0mほどの範囲に不整形で広がり、さらに南西に広がりが見られる。焼土は厚い箇所では0.2mほどを測り、そのなかには炭化米が散らばり、2箇所では0.5mほどの範囲で0.1mほどの厚さで集中して遺存していた。

根切溝と自然流路 (図6)

堀7と竪穴24の埋没後に根切溝と自然流路が東から西へ傾斜にそって切られている。堀の根切溝は幅1.0m弱で2mほどが自然流路に並行して検出されるが、流路形成以前に築かれたものである。自然流路は調査区の東では幅0.4mで深さは数cmであるが、途中で瀬と淵を繰り返してジグザグに下り、調査区の西では堀7の埋土を削り幅2.5m、深さ1.4mに広がっている。おそらく根切溝に雨水が流れ込んで遺構埋土を侵食していったものと思われ、流路内部には火山性の細かな砂と磨耗した土器片が多く含まれていた。

第4章 出土した遺物

今回の調査で得ることができた遺物は、主に古墳時代のもので中世に帰属するものである。古墳時代の遺物は、前述のとおり北神田遺跡に伴うものであり、中世に関しては大宮城跡に伴う遺物である。遺物の総数は、コンテナ約3箱分であるが完形資料はなく、ほとんどが破片資料である。そのため、本報告書では図化可能なものはすべて図示した。分量等の記載がないものは、表5～10の観察表を参照されたい。

1. 古墳時代の遺物

古墳時代の遺物は、主に先述した古墳時代の遺構である竪穴23、竪穴25から出土した。また、堀など中世の遺構はこれらの遺構の上に築かれており、中世の遺構埋土にも多くの古墳時代の遺物が混入していたため、居館に関わる遺構である堀3、堀6、竪穴24からも出土している。

古墳時代土師器 (図16・17、表5)

竪穴23から出土したもので図化できたものは1のみである。1は須恵器の坏身を模倣した土師器で、口縁部が緩やかに内湾する形態である。底部外面はケブリの後にヨコミガキが施されており、内面は丁寧なヨコミガキが施されている。

竪穴25からは2～6が出土している。2は壺の口縁部片で、口縁端部に面を持ち口縁部がわずかに外傾する。内外面ともに不定方向のミガキが、頸部外面はタテハケで調整されている。3は球胴甕の頸部付近の破片である。頸部外面には、接合時に板状工具でタテ方向にナデ調整を施して接合したことが窺える。6は丁寧なヘラミガキされた鉢である。口縁部がヨコナデによって作り出された形態をなす。

竪穴24からは混入品であるが、一定量の破片が出土している。その中で7～10を図示した。7・8は壺の破片である。8は小片でありどのような形態を呈していたのかは分からないが、外面にヘラで文様のようなものが描かれている。このようにヘラで文様が描かれている壺は古墳時代において当地域には確認されないことから、外来系の土器である可能性がある。

堀からは埋土の量が多いため、混入品として多くの破片が出土している。堀3からは11～20、堀6からは21～24、堀7からは25～27がそれぞれ出土している。

11は短頸壺である。口縁部はわずかに内湾し、外面と口縁部内面には丁寧なヘラミガキが施されている。

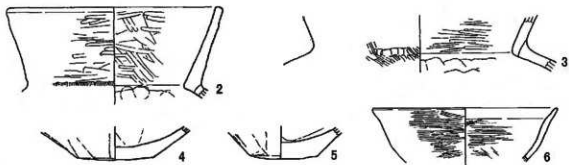
12・13は、底部片で、12が壺で13が甕の資料である。

14・15は、高坏の脚柱部片である。14は大きくラップ状に開き、3方向に円孔が穿たれている。一方、

豎穴23



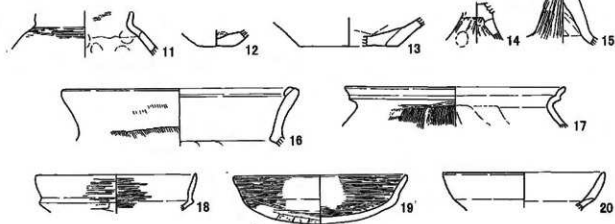
豎穴25



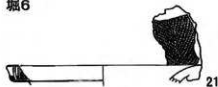
豎穴24



堀3



堀6



堀7

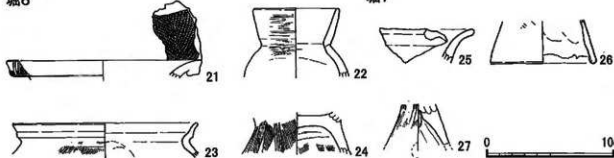
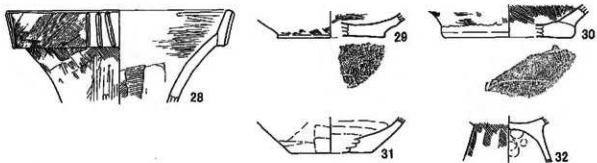
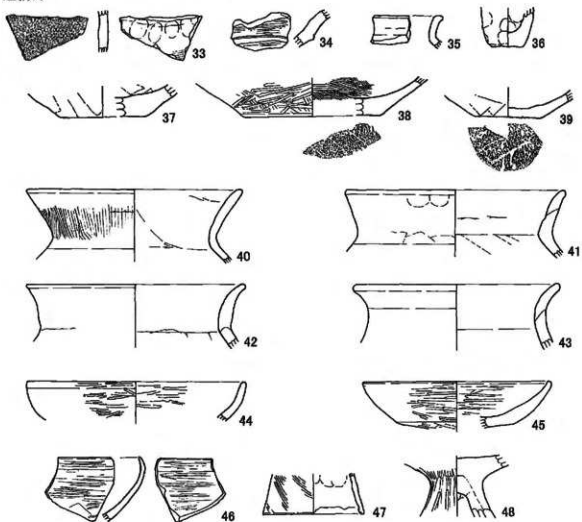


图 16 古墳時代遺物実測図 1

自然流路1



遺構外



鉄鏃
長: 6.4cm
厚: 0.45cm
幅: 1.1cm
重: 6.9g



管玉
◎ 厚: 1cm
◎ 石料: 綠泥片岩
◎ 長: 11.5cm
◎ 寬: 0.6cm
◎ 重: 0.9g

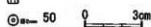


圖 17 古墳時代遺物実測圖 2

15の脚柱部は細身で脚裾部から大きく屈折して開く形態を呈する。ともに外面は丁寧なタテ方向のヘラミガキがなされている。

16はいわゆる駿東型甕である。口唇部の肥厚が顕著であり、外面は頸部外面にはハケ調整を窺うことができる。おそらく胴部は球胴を呈すると思われる。

17はS字状口縁台付甕（以下、「S字甕」という）の口縁部片である。在地の胎土で作られており、頸部に沈線を巡らせて、形態的にも製作技法的にも忠実に模倣しようとしていることが分かる。

18・19は身受けを持つ須恵器坯を模倣した土師器だが、18は鈎が明瞭にあるのに対して、19はわずかに屈折するのみである。ともに底部はケズリの後にヘラミガキがおよんでおり、内面は丁寧なヨコ方向のヘラミガキが施されている。さらに、19は内面が黒化されており、黒色土器の要素も兼ね備えている。

20は口縁部下半が屈曲する形状をなすことから、須恵器の腿を模倣している土師器と判断した。

21は折り返し口縁壺で、赤色顔料が塗布されている赤彩土器である。口縁端面には縄文を施した後、一部はナデ調整によって2本以上の棒状浮文が貼付されている。また、口縁部内面にも縄文+S字状結節文の組み合わせで施文がされている。

22は口縁部がわずかに開き、口縁から頸部にかけて段を持つ小型壺である。内面は磨滅が著しいが、外面はヨコ方向のヘラミガキが看取することができる。

23は在地の胎土で作られたS字甕である。口縁端部がわずかに外反し、やや長いものとなっている。

24は台付甕の脚部で、外面がタテ・ナナメ方向、内面がヨコ方向のハケで調整されている。

25は、甕の口縁部片でヨコナデにより大きく外に開く形状だが、胎土から外来のものである可能性はある。

26は台付甕の脚部で、端部が折り返されていることからS字甕の脚部と考えられるが、胎土から在地産である。

27は高杯の脚部で、1方向のみではあるが円形の透かしが残存する。外面はタテ方向のハケ後に雑なヘラミガキが施されている。

28は、一次口縁端部に真っ直ぐ立ち上がる二次口縁を貼付させた複合口縁壺である。二次口縁外面には4本1単位の棒状浮文が接合され、2か所しか残っていないがそれぞれの間隔から5方向に貼付されていたと思われる。内外面のほとんどがハケ調整であるが一部にヘラミガキが窺える。

32は在地産のS字甕脚部で、底部内面が被熱により黒変している。

33は外面に施文があることから壺と判断した。外面の施文は一見縄文に見えるが、刺突によるものである。こうした施文方法は、当地域にはなく菊川式土器に多く見ることができる刺突による擬縄文と考えられる。しかしながら刺突が乱雑であり、小片であることから断定することは難しい。

34は内外面ともに丁寧なヘラミガキが施された赤彩土器である。大きく屈折した形態を呈することから、二重口縁壺であると考えられる。また、外面の屈折部上方には沈線が巡る。

35は甕の口縁部片でわずかに外傾し、口唇部が肥厚する。こうした形状や胎土が在地にはないことから、外来の要素を持つ土器と思われる。

40～43は甕の口縁部片である。40は外に大きく開き、41・42は口縁部の接合方法が異なるが、口縁部が肥厚し口縁端部がヨコナデにより外反し、43は他に比べて頸部の湾曲は緩やかで長くなる形態である。

44～46は土師器の坏でありすべて丁寧なヨコミガキが施されている。45は底部がヘラケズリによって成形され、胴部境に稜を持つ。このような形態は、西駿河の古墳時代中期～後期にかけての遺跡で

竖穴23



竖穴25



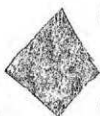
竖穴24



堀3



堀6



堀7

自然流路1

土坑11



遺構外

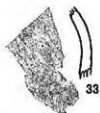
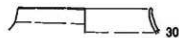
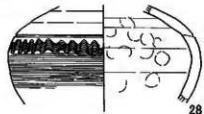


图 18 须惠器实测图

多く出土するものである。

49・50は遺構外から出土したが、古墳時代に帰属するものであり、集落から出土することは非常に珍しいものである。49は鉄鍔である。茎部は途中から欠損しているが、形状から長茎鍔に分類されるものである。

50は緑泥片岩製の管玉である。孔の径が違うことから片面穿孔によって制作されたことがわかる。
(参考文献)

山本恵一 1996 「静岡県下の6～7世紀の土師器—駿河東部・伊豆北部の現状について—」『東国土器研究』第4号

山本恵一 1999 「駿河の古墳時代中期の土器—東駿河を中心にして—」『東国土器研究』第5号

渡井英著 1997 「弥生・古墳時代編」『滝戸遺跡』富士宮市教育委員会

渡井英著 1999 「中見代式土器小考—大塚式土器から中見代式土器へ—」『東国土器研究』第5号

須恵器 (図18、表6)

須恵器については、これまでの調査で出土したものと同様に全てが破片資料である。多くは、甕や壺の胴部片で外面が格子目タタキや平行タタキで成形されたもので、胎土は白っぽく7～8世紀に帰属する湖西産の須恵器である。その中で特徴のあるもののみ概観する。

2は坏蓋の小片である。罫が小さいが明瞭に突出している。

6は樋口縁部の小片でヨコナデにより端部が外に大きく屈折する。外面には波状文が巡る。器壁はやや厚く、断面は赤褐色をしており低温で焼成されていることが窺え、TK208～23並行の広義である初期須恵器に分類されるものである可能性が高い。

11は坏蓋で端部中央は凹縁が巡る。天井部に向けてわずかに湾曲し、天井部は高いものと考えられる。端部内面には帯状に自然釉の付着が窺える。

13は甕の口縁部片である、口縁端部が痛み上げられて成形されており、外面下半には断面が三角形の突帯が2条巡る。

28は甕の胴部片である。円形の透かしが施された部分が残存していなかったため、透かしの大きさは不明である。胴部最大径付近に波状文が施され、その上方には1条の沈線が、下方にはカキメが巡る。

30は坏身の小片である。口縁部立ち上がりの部分のみのこるだけで断定はしにくいだが、器壁が薄く全体的にシャープに仕上げられ、立ち上がりが長いことから遠江編年Ⅱ期からⅢ期前葉のものと思われる。

(参考文献)

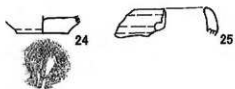
田辺昭三 1981 『須恵器大成』

鈴木敏則 2004 「第5章第2節 静岡県下の須恵器編年」『有玉古窯』浜松市教育委員会

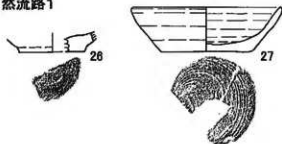
2. かわらけ (図19・20、表7)

かわらけ (土師質土器) は45点を図示している (図19・20)。これらのうち11の1点を除く全てがロクロ成形のものであり、底部には糸切り痕を残す。ロクロ成形のかわらけは、富士氏に関連すると思われる在地のもの (在地系) と、西駿河からの搬入品であり、今川氏に関連すると思われるもの (今川系) に大きく分けられる。今川系のかわらけはいずれも16世紀代に属するものと思われ、器厚の薄い皿状を呈しており、色調が明るく胎土が密であることから在地系のものとは明瞭に区別することができる。

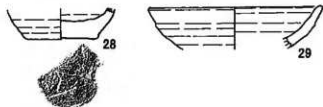
堀7



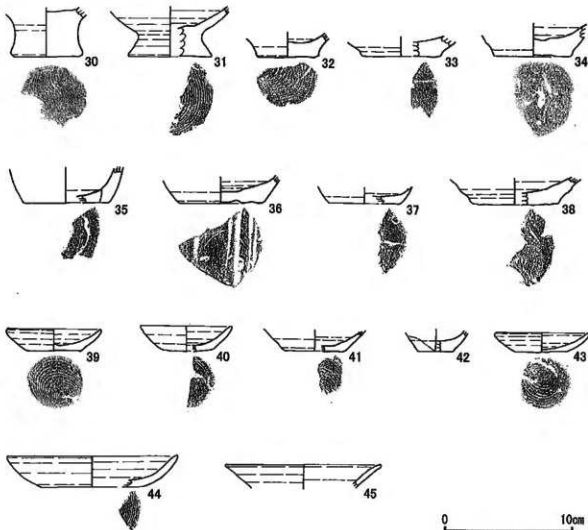
自然流路1



土坑10



遺構外



0 10cm

図19 かわらけ実測図1

在地系のかわりは、平底のものと柱状高台のものに分けられ、柱状高台のものは11世紀末から12世紀中葉に属するものと思われる。平底のものは、器高の大きい坏状のもの（a類）と器高が小さく体部の短い皿状のもの（b類）に分類され、いずれも形態の違いにより11世紀末から16世紀代までの時期幅が存在するものと思われる。

1～6は整穴24出土で、1～4はいずれも底部破片である。底部が厚く、体部がやや内彎する器形になるものと思われる。5・6はb類で、体部が外傾し、口唇部がわずかに丸みを持つ。いずれも在地系のかわりで、14世紀末～15世紀代に属すると考えられる。

7～17は堀3出土で、7～10は在地系のかわりである。7は台部が内傾する柱状高台かわりへの破片である。8はa類の底部破片であり、やや突出させた底部の内面中央を窪ませる。15～16世紀代のものと考えられる。9はb類であり、口縁から底部までの3分の2程度が残存する。体部が外傾し、口唇部を尖らせ、底部内面中央を窪ませる。12～13世紀に属するものと思われる。10はb類の口縁部破片と思われ、内傾する口縁部の外面をやや窪ませ、口唇部に面取りを施す。15～16世紀代に属すると考えられる。

11は手づくねかわりへの口縁部破片であり、口縁部が大きく外反する皿状の器形になるものと思われる。器壁が2～3mm程度と非常に薄く、胎土が硬質で灰白色を呈している。伊勢湾岸地方からの搬入品と見られ、12～13世紀代に属するものと考えられる。

12～17は今川系のかわりである。12・13・15は底部から口縁部まで残存しており、体部が内彎する15に対し、12・13は体部の内彎が弱く、12は特に口縁部が大きく外反する。14・16・17は底部破片であり、14は体部内外面の一部に油煙が付着していることから、灯明皿として使用されたものと思われる。

18～23は堀6出土で、18～21は在地系のかわりである。18は底径が小さく底部に厚みを持ち、底部内面中央に盛り上がりが残る。体部はやや外傾し、口縁部がほぼ直立して口唇部を尖らせる。11世紀末～12世紀前半に属すると思われる。19～21は底部破片である。19・20はいずれも底部が厚く、19は体部がやや内彎するのに対し、20はほぼ直線的に開く。21は薄い平底の底部をやや突出させ、器厚の薄い体部がほぼ直線的に開く。22・23は今川系の底部破片であり、いずれも底部内面中央を窪ませる。

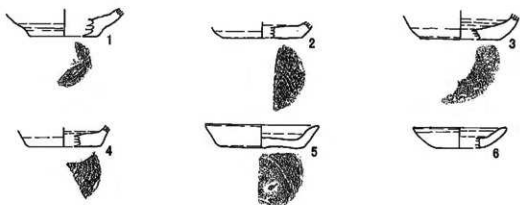
24・25は堀7出土で、いずれも在地系の破片である。24は底部破片であり、やや突出した底部から体部が直線的に開く。25はb類の口縁部破片であり、口縁部が内傾して口唇部にやや丸みを持つ。16世紀代に属すると考えられる。

26・27は自然流路1出土で、いずれも在地系である。26は底部破片で、底部の器厚が厚く、底部外面をわずかに突出させる。体部下半はやや内彎しながら立ち上がる。27は底部から口縁部まで残存しており、器形がほぼ逆台形状を呈する。薄い平底の底部から体部が直線状に立ち上がり、口唇部は丸みを持つ。15～16世紀代に属すると考えられる。

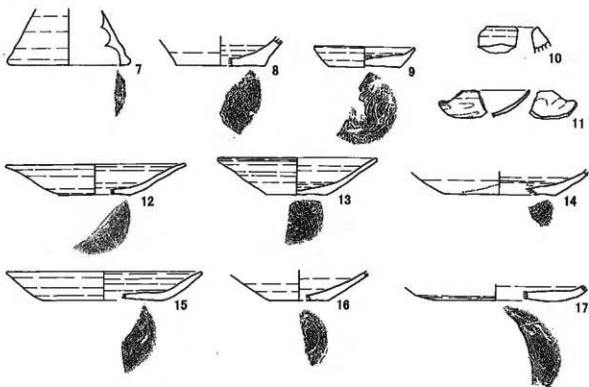
28・29は土坑10出土で、いずれも在地系である。28は底部破片で、器厚の厚い底部をわずかに突出させ、底部内面中央が盛り上がる。体部はやや内彎しながら立ち上がる。29は口縁部～体部の破片で、体部が内彎する碗形の器形であり、口唇部に丸みを持たせる。14世紀末～15世紀代に属すると考えられる。

30～45は遺構外出土で、30～43は在地系のかわりである。30・31は柱状高台かわりで、30は器高が高く、台部がやや内傾する台部の破片である。31は器高の低い台部が強く内傾して立ち上がり、体部下半が外反する。32～38は底部破片で、32・33は底部が厚く、体部下半が直線状に外反

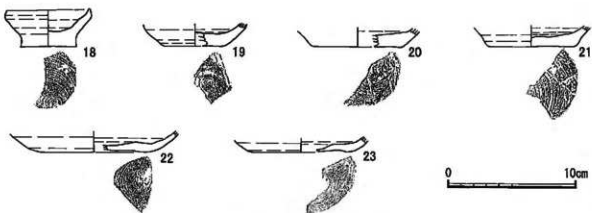
竪穴24



堀3



堀6



0 10cm

図20 かわらけ実測図2

しており、11世紀末～13世紀代に属すると考えられる。32は底径が小さく底部内面中央の盛り上がりわずかに残り、より古い時期の様相を示す可能性が高い。34は底部がわずかに突出し、体部下半がやや内彎する。35は底部が薄く体部下半が内彎し、底部外側に接合痕が残る。36は底部外面にスノコ状の圧痕が残り、底部内面にはナデ調整を施す。37はb類とみられ、器厚が薄く、体部下半が外反する。38は体部下半がやや外反し、外面には弱い稜が形成される。42は底径が小さく底部に厚みを持ち、内面全体と体部外面の一部に油煙が付着する。灯明皿として使用されたものと思われる。

39～41・43はa類の小型品で、39は完形品、43も口縁の一部が欠損する他はほぼ完存している。底部が薄く、体部が外反してほぼ直線状に開く器形である。法量が口径7.2～7.4cm、底径4.0～4.6cm、器高1.5～2.0cmの範囲におさまり、規格性が非常に強い様相を示す。いずれも16世紀代に属するとと思われる。

44・45は今川系のかわりけである。44は器高の低い皿状を呈し、体部下半が内湾する。45はやや外反する口縁部の破片である。

〈参考文献〉

池谷初恵 2008 「伊豆地域におけるかわらけの変遷とその背景」『地域と文化の考古学Ⅱ』

渡井英著 2009 「浅間大社遺跡における土師器皿の変遷（予察）」『静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第201集 浅間大社遺跡 山宮浅間神社遺跡』財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

八峠真 2001 「柱状高台考」『中世土器研究論集—中世土器研究会20周年記念論集—』

3. 中世陶磁器（図21・22、表8）

中世陶磁器は舶載・国産品ともに、これまでの調査で出土した量と比較して、極めて少ない量だが、産地・器種ともにバラエティ豊かである。ここでは図化可能なものを図示し、器形・技法・帰属時期などを簡単にまとめておく。

1は壑穴23の埋土から出土したもので、攪乱により混入したものである。口縁部だけの破片資料であるが、器形から瀬戸・美濃産の大窯2期に帰属する筒形香炉であるとされる。内外面や断面全体が煤けていることから、破砕した後に被熱したと思われる。

2は灰釉陶器碗である。高台は長く外に開き、胎土などからH-72期並行の在地で焼かれたものである。

3は瓦質土器の火鉢である。底部の破片で、脚が貼付されていた痕跡が残る。直線的な稜であることから、方形の火鉢であったと推測する。

4は舶載の白磁で、8方に面取りされたB群に属する面取盃である。底部外面は露胎し、高台の端面は重ね焼きの釉薬が付着している。

5・6は瀬戸・美濃産の陶器である。5は天目茶碗で、口縁部が立ち上がり胴部境に稜を持つ形態から、古瀬戸後IV期古段階に位置付けられる。6は口縁部の内外面に灰釉を施軸された、縁軸小皿で貫入があり、底部は糸切痕が看取することができる。こちらは、古瀬戸後IV期新段階のものである。

7は播鉢の破片資料で、小片であるが古志戸呂産である。

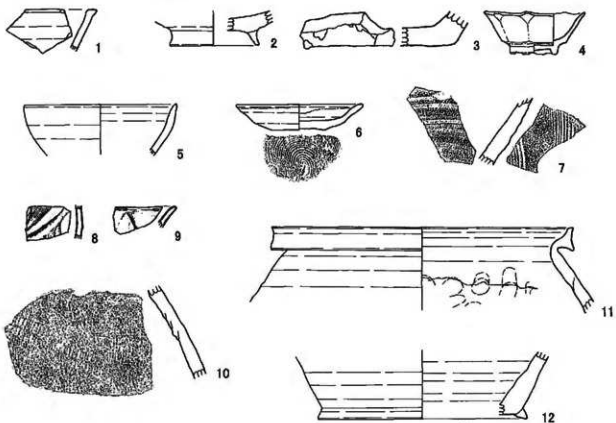
8・9は舶載品である。8は青白磁の梅瓶であり、外面には大きめの貫入がある。9は、蓮弁文が施された青磁の碗である。B-1類に分類されるものである。

10～12は常滑産の陶器である。10・11は甕で、11は形態から5型式に比定される。12は鉢で、高台が外に大きく開き短いものである。こちらは、6型式に分類された。

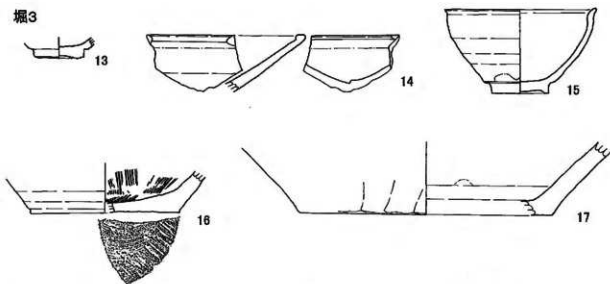
13～15は瀬戸・美濃産陶器で、13・15が天目茶碗で、14が御目付大皿、16が播鉢である。13・

豎穴23

豎穴24



堀3

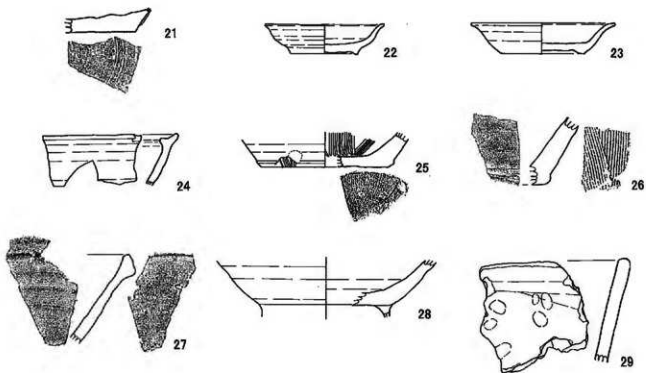


堀6



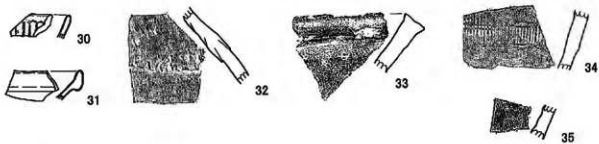
0 10cm

图 21 中世陶磁器実測图 1



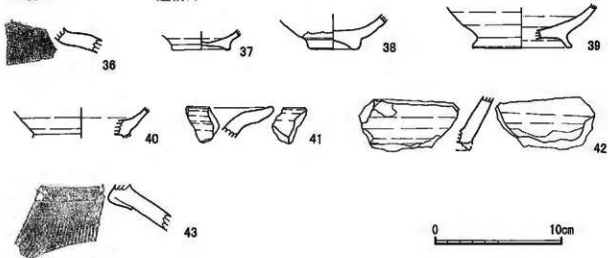
堀7

土坑10



土坑13

遺構外



0 10cm

图 22 中世陶磁器実測图 2

15 ともに高台付近が露胎している。13 は高台と底部境の屈曲が顕著ではっきりとした稜を持つ。一方 15 は、完形に復元することが可能で、口縁部がヨコナデによって大きく外に摘み出されている。13 が古瀬戸後Ⅳ期古段階に、15 が古瀬戸後Ⅳ期新段階に帰属する。14 は口縁部内外面に鉄釉が施され、内面の一部には赤色顔料が付着している。古瀬戸後Ⅲ期に属する。

16 は古志戸呂産播鉢の底部片である。糸切痕が窺え、撞目も深く残っている。古瀬戸後Ⅳ期新段階並行と思われる。

17 は帰属時期が不明であるが、常滑産の甕である。

18 は瓦質土器の火鉢脚部片で、底部が弧を描くことから円形を呈していたと考えられる。丁寧に面取りされて成形されている。

19・20 は舶載の染付磁器である。19 は高台は低く B 1 群に分類される碗または皿である。20 は外面の高台から胴部にかけての屈折が全くない C 群に分類される皿である。外面には唐草文が描かれている。

21～27 は瀬戸・美濃産陶器である。21 は底部の破片資料であるが、鉄釉が施された大窯期の壺類であると思われる。22 は口縁端部が大きく反る灰釉端反皿で、23 は高台が低い鉄釉稜皿である。ともにトチン痕を看取することができ、大窯 2 期に帰属する。なお、22 は底部一面に赤色顔料が付着して出土した。このことから、赤色顔料を使用するための容器として使用した後に、そのまま廃棄されたことが分かる。24 は灰釉卸目付大皿で、古瀬戸後Ⅳ期古段階に比定される。釉薬が平らになっていることから、被熱したと思われる。25～27 は播鉢で 25・26 は大窯期、27 は大窯 2 期に属する。

28・29 は常滑産の鉢である。28 は高台を欠くが 4 型式に分類される。

30・31 は舶載の磁器である。30 が青磁碗で内外面に貫入があり、B-3 類に属する。一方 31 は、白磁碗で口縁端部が肥厚するⅣ類である。こちらも内外面に貫入があるが、釉薬がマットになっていることから火を受けたと考えられる。

32～36 は常滑産陶器である。32・34・35 は甕の破片で、33 は 11 型式に属する鉢の口縁部片である。36 は甕の肩部付近の破片である。

37・39・40 は山茶碗の底部片である。37 は小型で、39 は高台が外反し高くなっている。

38 は瀬戸・美濃産天目茶碗で、13 と大きさは異なるが同じ底部の形状から、古瀬戸後Ⅳ期古段階に帰属する。

41～43 は常滑産陶器で、41 が甕で 3 型式に比定され、42 がおそらく鉢で 6 形式に、43 が甕に分類される。

(参考文献)

- 愛知県 2007 『愛知県史 別編 窯業 2 中世・近世 瀬戸系』
愛知県 2012 『愛知県史 別編 窯業 3 中世・近世 常滑系』
斎藤孝正 1989 「灰釉陶器の研究Ⅱ」『名古屋大学文学部研究論集』104
静岡県菊川町教育委員会 2000 『横地城跡 総合調査報告書 資料編』
藤沢良祐 2003 「瀬戸・美濃大窯の生産と流通」『戦国時代の考古学』
藤沢良祐 2008 『中世瀬戸窯の研究』

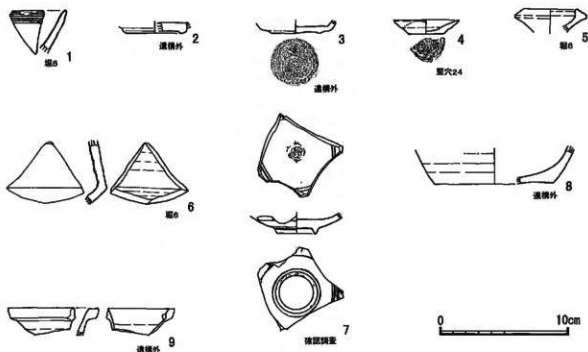


図 23 近世以降遺物実測図

4. その他

近世以降の遺物 (図 23)

今回の調査では、先述したように大宮町大火後の攪乱や旧法務局造成に伴う攪乱によって、近世以降の遺物もごくわずかであるが出土している。廃城後の調査地周辺の環境についても参考になるかもしれないので、簡単に概観しておく。

1 は皿類に分類されるもので、黒い粒子が多く胎土も非常に精緻であることから明治以降のものと思われる。

2～5 は陶器である。2・3・5 には灰釉が、4 には鉄釉が施されている。2 は 17 世紀前半に属する陶器で、瀬戸・美濃産の碗である。3 は瀬戸・美濃産小壺の蓋である。摘みが欠損し、裏面にはトチン痕と糸切痕が窺える。18 世紀後半～19 世紀中頃に比定される。4 は瀬戸・美濃産で皿と判断したが、釉薬のかけ方が雑なことから壺蓋の可能性もある。5 は瀬戸・美濃産徳利の口縁部で、内外面ともに貫入があり、18 世紀に帰属する。

6・8 は明治期のものである。6 は志戸呂産インク瓶で、8 は益子産の鍋である。

7 は肥前産の磁器で、18 世紀末～19 世紀初頭の染付碗である。9 は近代の植木鉢である。

砥石 (図 24)

これまでの調査では、主郭の中心付近の調査であったためか、多くの種類の石製品が出土したのに対し、今回の調査では砥石のみの出土となった。

7・8 以外は手持ち砥石と考えられ、1・2・5・7・8 は板状の石を用いており、その他は様々な形をなしている。

ここで注目したい点は、前回指摘されていた「通常の使用と異なる細かな刻み痕」が他の遺跡と同様に目立つことが指摘されていたが、5 の上面にも平行に刻まれた刻み痕を観察することができた。

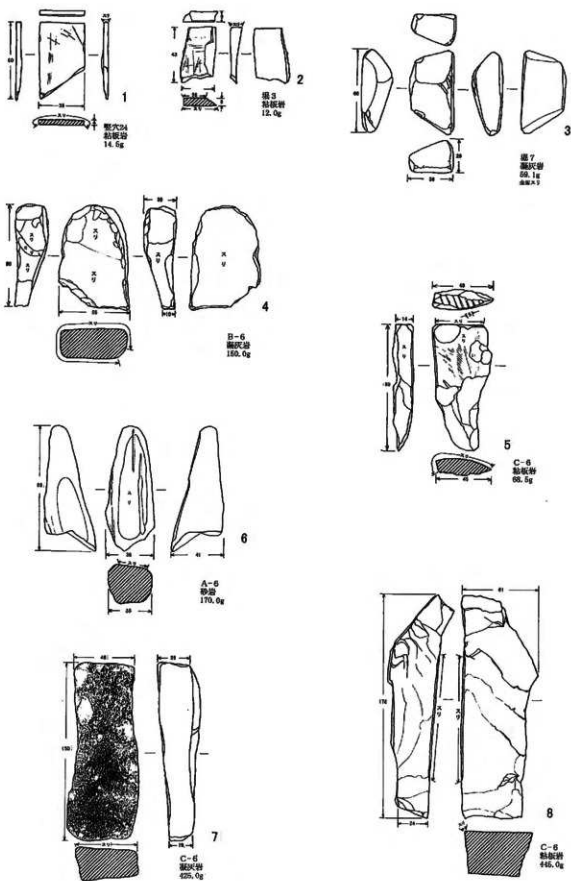
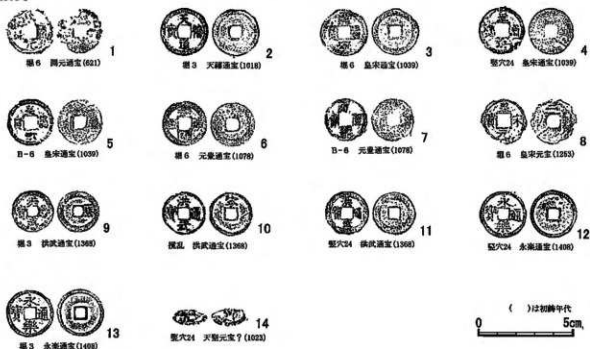
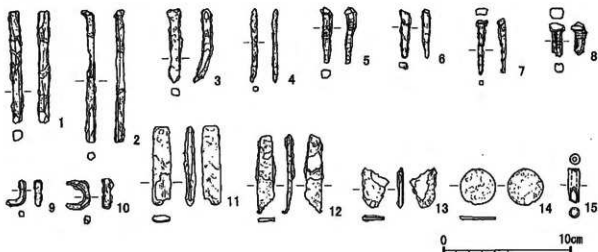


图 24 砥石类测图

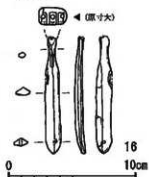
銭貨



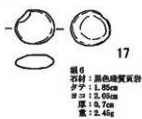
鉄製品



ブラシ



基石



土製円盤



図 25 銭貨・鉄製品・その他実測図

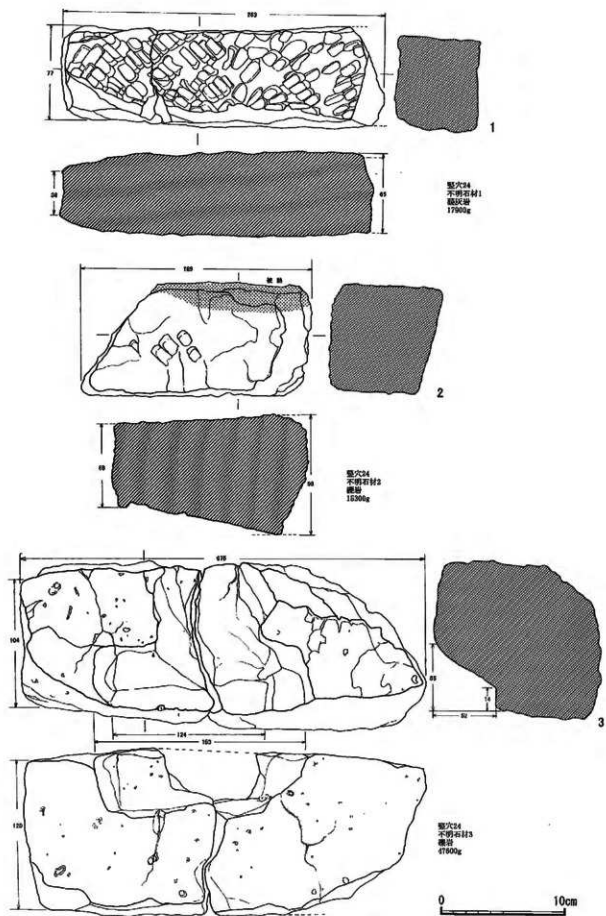


图 26 不明石材实测图

銭貨 (図 25、表 9)

本調査では、14枚の銭貨が出土した。その中で、本調査成果の一つと言えることが、これまで出土がなかった永楽通宝の出土である。堀3と堅穴24からそれぞれ1枚ずつ出土している。前回永楽通宝は、戦国時代に入ると東国では特に永楽通宝を基準貨幣に定めようとする動きがあり、後北条・武田氏などは永楽通宝のみが精銭として扱われていたとし、元富士大宮司館では渡来銭よりも遥かに高い価値を待っていた永楽通宝をあまり使用することができなかつたかもしれないと指摘されている。

確かに今回の調査で出土した銭貨もおそらく落銭と考えられる。しかし、主郭のはずれである地から出土したことによって、こうした指摘も妥当であるが価値があるものゆえに落銭が少なかったと考えることもできるのではないだろうか。

また、今回は寛永通宝が出土しなかったことによって、より廃城の年代と遺物の年代観が一致してくると思われる。

鉄製品・その他 (図 25、表 10)

鉄製品に関しては図化可能なものすべてを示した。1～9までが断面が方形の和釘である。2・7・8は頭部が残っており、そこから頭部をたたいて薄くのばした、頭巻釘と呼ばれるものと考ええる。

11～13は刀子の刃部と思われる。いずれも形状は不明であるが、12は熱を受けて曲がったような形状をしている。

14は鉄製の円盤で用途は不明である。15は鉄製品でなく土製品であるが鉄分を多く含んだ土で作られている。

16は遺構に伴わないものであるが、獣骨で作られたブラシの柄である。古いものは幕末期から輸入されているが、これは明治以降のものであるとされる(堀内氏教示)。

17は黒色珪質頁岩いわゆる那智黒石と呼ばれる自然石の基石である。よく使いこまれたせいか、片面のみ面を持つ。

18は古墳時代の土師器を再利用した、土製円盤である。再利用される前の土師器は赤彩土器であったようで、一部に赤彩が残る。いつの時期に再利用されたのかは不明である。

不明石材 (図 26)

前述したが、今回堅穴24では、焼けた礫が多量に出土している。その中で図示した3点に人為的な痕跡が認められた。

1は凝灰岩で一定の方向から鑿によって長方形に成形された石材で、加工痕が明瞭に観察することができる。2も鑿で加工されている石材であるが、こちらは礫岩で非常にもろい。

3は礫岩をコの字状に加工した石材である。元々柔らかく加工しやすい石であるが、被熱によりさらにもろくなり、赤変している。

以上のようにすべて加工しやすい石材であるが、形状からどのような用途であったのかは知るすべもない。また、本来堅穴24に附属するものであったのかもわからない。堅穴24が廃絶する時に、一緒に廃棄されたものである可能性がある。

第5章 まとめ

1. 元富士大宮司館跡以前について

今回の調査では、平成7・9・10年度調査で発見された古墳時代中・後期集落の続きを確認することができた。『元富士大宮司館跡』では、あまり考察されていなかったのここで簡単にまとめることとする。

本調査では、古墳時代の遺構として竪穴23・25を検出した。しかし、旧法務局の造成による攪乱が及んでいたり、中世の居館に関わる遺構が上から築かれていたりするため、住居の全容が不明瞭である。竪穴23・25の帰属時期は、遺物から6世紀代と考えられる。それ以前の遺物も混入品として出土していることから、本調査区周辺にも5世紀代の集落が展開していたと想定できよう。竪穴23はカマドが破壊された状態で検出でき、両袖部に椀状の窪みが穿たれていることから、芯石の掘方と考える。

集落の展開としては、カマドを持たない中期の住居址群が形成されたのち、カマドの登場を画期として中期の集落よりも東から南にかけて展開していく様相である。

また、遺構に伴わなかった遺物として緑泥片岩製の管玉(図16-50)と鉄鏃(図16-49)が出土している。特に集落から緑泥片岩製の管玉が出土することは極めて重要であり、富士宮市内では初めてのことである。残念ながら、遺構内からの出土ではないため、明確な帰属時期は不明であるが、集落の存続時期に伴う古墳時代中～後期、この時期は一般的に集落内において石製模造品が多く出土する時期であるため、概ねこの時期に該当するものであろう。安易に祭祀に関するものと直結させることは良くないが、前回指摘されていたように拠点集落であったということが出来る。なお、初期須恵器の流入や集落の類似性から富士市沢東遺跡との関連が指摘されているが、集落から多くの石製品が出土している富士市宮添遺跡との関連も興味深いものである。

2. 今回の調査からみた元富士大宮司館跡

次に、遺物からみた元富士大宮司館の変遷をまとめてみたい。まず、『元富士大宮司館跡』では、居館の消長をⅠ～Ⅳ期に分類されているため、ここでもこの分類にそって今回検出することができた居館にかかわる遺構の帰属時期を考える。なお、本調査は、主郭の中心から外れるためか、Ⅰ期・Ⅱ期に帰属する遺構は検出されなかったが、混入品の中には12～14世紀に比定されるかわらけや陶磁器が出土している。

堀3は、第3章で述べたように、元富士大宮司館Ⅲ期に防衛強化のために築かれた堀の続きである。出土遺物からも元富士大宮司館Ⅲ期に当てはまる、古瀬戸後期段階の陶器類や16世紀に比定されるかわらけや船載陶磁器の染付皿などが出土している。

この堀3を直交して切っている堀6は、必然的にⅣ期に分類される。遺物も16世紀に比定される船載陶磁器である染付皿や大窯1～3期に分類される瀬戸・美濃産陶器の出土が目立つ。

一方、堀7は、調査区の南西隅で確認したためか、時期を判断するための遺物が他の遺構よりも乏しい。遺構の構造から堀6との共通点が多いことから、Ⅳ期に分類した。また、出土した遺物は灰軸陶器や白磁など古手のものがほとんどであるが、これは自然流路による混入と考えることができる。竪穴24は第3章で堀3と同時期のⅢ期に帰属すると考えた。その根拠としては、出土遺物の類似性を挙げる。古瀬戸後期段階の陶器類や16世紀に比定されるかわらけが多いほか、堀3・竪穴24ともに小片であるため図示することができなかったものの中に灰軸陶器片や14世紀頃の船載陶磁器片と

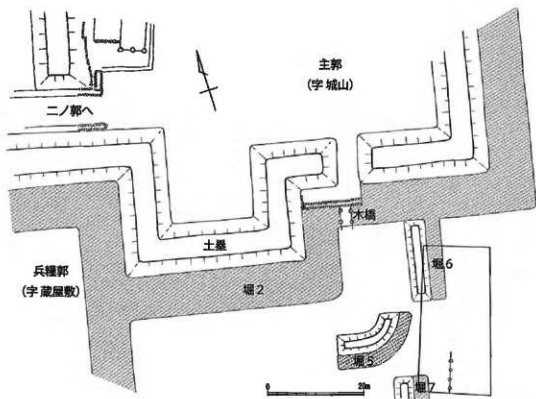


図 27 虎口復元図

いう古手の遺物も出土しているからである。さらに、この二つの遺構のみから永楽通宝が出土し、同じく明銭である洪武通宝も出土している点も大きい。

そして、今回出土した中世土器・陶磁器をまとめたものが表2～4である。個体数で言うと、かわらけ片が圧倒的に多く、次に常滑産陶器が多い。常滑産陶器に関しては大型甕の破片数が多いからであろう。前回指摘されていたように、古瀬戸後Ⅳ期古段階つまり、15世紀中頃から後半にかけての時期が、元富士大宮司館における国産陶器出土量のピークにあたる。しかし、今回の調査では大窯1～3期までの資料も、これまでの調査よりも多い。これまでは大窯期の瀬戸・美濃産陶器の出土量が急に落ち込むとされていたが、調査地点の問題であるようで、大窯1～3期においても一定の出土量があると言える。さらに、今回は大窯4期の資料は全くないことや、16世紀以降のかわらけや江戸銭が出土しないこと、武田氏が滅んだ時期とも一致することから、16世紀後半には元富士大宮司館は廃城になり、居住空間の移動を示す根拠がより色濃くなった。

3. 元富士大宮司館Ⅳ期（大宮城）の虎口の復元

元富士大宮司館跡は、11世紀後半に掘立柱建物群が築かれ（Ⅰ期）、13世紀後半から16世紀前半まで1町四方の居館が運営される安定期を経て（Ⅱ期）、16世紀前半の動乱期に堀の増築（Ⅲ期）、16世紀後半の武田氏による大規模な堀の改修（Ⅳ期）の4期の変遷が想定されている。

今回の調査は、元富士大宮司館跡の外郭の南東隅にあたり、元富士大宮司館Ⅲ期に構築された堀3の東への延長と、初例となる中世工房跡の堅穴24や柱列2などを確認し、元富士大宮司館Ⅳ期の武田氏による大規模改修時では新たに構築された堀6・堀7・柱列1などを確認した。

これらの新たに確認された遺構により大宮城にかかわるⅣ期の虎口の前面の状況を復元してみたい（図27）。

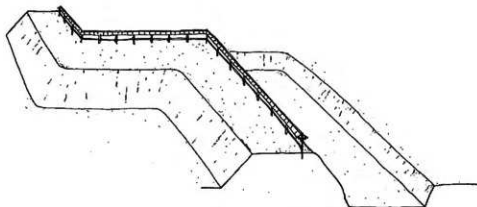


図 28 堀および土塁の復元図

先ず、主郭から南に向けた虎口は幅 5m で土塁を切通して通路とした硬化面で確認でき、堀 2 の手前で南北 3m、東西 12m の細長い「升形」の空間を「折れ」をもった土塁側に沿って築き、その先端に木橋を設けている。木橋の長さおよそ 5m、橋脚は 4 脚で幅は 2.3m ほどの規模で、径 0.5m ほどの柱穴からすると堅固な感はない。木橋下部には拳大の礫が大量に落ちていたが、木橋用材は確認されず、枋材が多数遺存していた。なお、この堀の復元は元日本建築専門学校教授建部恭彦氏によって前回調査で報告されている（図 28）。この木橋に対しては西側から「横矢」を利かすために升形に土塁を折って掩護している。虎口から木橋は直線的に配されることから正面には郭内を隠す「藪」の役として、堀 2 の折れに合わせるように湾曲した土塁と堀 5 を設けている。

これに今回確認された堀 6 が架橋の東で堀 2 から直角に南に向けて堀 2 の折れの延長まで伸び、南北 18m、東西 15m ほどの升形の「馬出し」を作り、東側からの侵攻に備えている。また、堀 5 の南にも堀 7 を南北方向に築き、並列して柵列を設けるなど、東から南に緩く下る地形変化のない地勢に対する防御に廣心した「構え」をみて取れる。

以上、甲陽軍鑑のいう、武田 24 将の原昌胤の富士郡並びに浅間神社支配から大宮城の城代としての城取の検証となるが、文書に残る一和尚清長を転居させて築いた城取は武田氏築城術（甲陽軍鑑城取之事）の最大の特徴である「馬出し」を重要視した縄張りを描いた結果の検証とも思われるのである。

今回の大宮城跡にかかわる元大宮司館跡第 V 次調査の成果は、11 世紀後半に登場する元富士大宮司館跡の下層に存在していた「北神田遺跡」が 5・6 世紀には緑泥片岩製の管玉や鉄族などの祭祀を予想できる遺物を所有する内陸部の有力遺跡であったことが知れたことである。以後、遺跡ははっきりとした姿で継続することはないが、富士郡衝の衰退以降、視点を内陸部に向けた富士氏にとって北神田遺跡の地勢は、浅間神社と対峙するには絶好の条件を提供していたものと思われる。

ともあれ、元富士大宮司館跡はこれ以降 4 期 500 年に亘って、「浅間神社遺跡」と共に歩み、さらに 12 世紀に至ると「山宮浅間神社遺跡」や「村山浅間神社遺跡」の考古学的活動の姿もはっきりしたものになり、これらの神社と富士大宮司が果たしたであろう祭務行為は主従を問わず関わりを問うべき時に来ているように思う。現在、市教委は史跡富士山の構成資産の整備に伴う発掘調査を続け、近年中には報告書の刊行も予定されている。これを機に中世富士宮の姿を可能な限り捉えていくことが責務であると考えている。

末筆になりましたが、発掘調査の遂行にあたり関係各位のご理解とご協力に対しまして感謝申し上げます。

表2 中世土器・陶磁器集計表

種別	器種	破片数	時期	合計
灰軸陶器	碗	1	053 並行	8
		1	H72 並行	
	不明	1	H72 並行	
山茶碗	碗	3		3
土師質土器	ロウロかわらけ(在地系)	1078	12～16世紀	1639
	ロウロかわらけ(今川系)	558	16世紀	
	手づくねかわらけ	3		
瓦質土器	火鉢	1	15～16世紀	15
	不明	11		
	不明	3		
志戸呂製品	播鉢	1	後IV新並行	1
瀧美製品	壺	2		14
	鉢	8		
常滑製品	鉢	4		55
	壺	2		
	壺	1	3型式	
		1	5型式	
		40		
		1	4型式	
		1	6型式	
		1	7型式	
		1	11型式	
		不明	7	
瀬戸・美濃製品	天目茶碗	1	後Ⅲ	31
		2	後IV古	
		3	後IV新	
		1	後期	
	灰軸平碗	1	後Ⅲ	
		1	後期	
	灰軸罐輪小皿	2	後IV新	
	鉄軸罐輪小皿	1	後IV新	
	灰軸燗反皿	1	大塚1	
		1	大塚2	
	鉄軸燗皿	1	大塚2	
		1	大塚3	
	灰軸皿類	1	大塚1～2	
	鉄軸皿類	1	大塚3	
	鉄軸鉢目付大皿	1	後Ⅲ	
	灰軸鉢目付大皿	1	後IV古	
	灰軸楕圓	3	後期	
	播鉢	1	後IV新	
		1	大塚2	
		1	大塚3	
	2	大塚		
香頭	1	大塚		
低輪筒形香炉	1	大塚2		
鉄軸茶入れ	1	後期		
白磁	碗 (IV類)	1	12世紀	6
	碗 (V～VII類)	1		
	面取壺 (B群)	1	15世紀前半	
	四耳壺	1		
	小壺	1		
青磁	龍泉系 蓮弁文碗(B1類)	1	13世紀中葉	9
	龍泉系 蓮弁文碗(B3類)	1	15世紀中葉	
	碗 (A類)	2		
	碗 (B0類)	1		
	碗 (B1類)	1		
	碗	2		
	折縁盤	1		
青白磁	梅瓶	1		1
染付	皿 (B1群)	1	15世紀後半	2
	皿 (C群)	1	15世紀後半～16世紀前半	
稀輪磁器	壺	1		1
合計				1784

表3 中世土器・陶磁器の構成割合

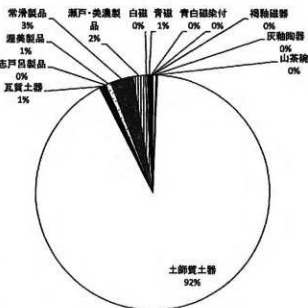


表4 中世土器・陶磁器の構成割合(かわらけ除く)

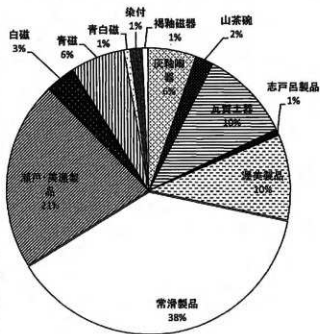


表5 古墳時代遺物観察表

番号	種類	計測値 (mm)		色調	胎土	構成	保存状況	備考	
		口径・直径	高さ						
1	坏	(11.6)	(3.2)	7.5YR6/3 におい焼	密	良好	口縁部 1/5		
2	甕	(8.0)	(7.2)	7.5YR7/4 におい焼	やや密 (1mm 程度の長石多く含む)	良好	口縁部一部 1/8	内外面一部酸化	
3	甕	(5.5)	(4.4)	10YR8/3 淡黄焼	やや粗 (1mm 程度の長石多く含む)	良好	胴部 1/5		
4	甕	(6.0)	(2.8)	10YR5/4 に近い黄焼	密 (0.1mm 程度の長石わずかに含む)	良好	底部 1/5	外周縁部により割綻	
5	甕	5.2	(2.5)	10YR5/3 に近い黄焼	密 (0.1mm 以下の長石わずかに含む)	良好	底部ほぼ完全	一部腐食	
6	鉢	(14.4)	(4.3)	5YR6/6 焼	密	良好	口縁部 1/5		
7	甕	(7.0)	(4.5)	7.5YR7/6 焼	密 (2mm 以下の赤色粒少し含む)	良好	胴部 1/4		
8	甕			7.5YR8/2 灰焼	密 (1mm 以下の長石少し含む)	良好	小片	縁部あり	
9	甕	(6.4)	(2.3)	5YR5/4 に近い赤焼	密 (1mm 以下の長石少し含む)	良好	底部 1/5		
10	甕	(7.8)	(3.4)	5YR5/6 赤赤焼	密 (1mm 以下の長石少し含む)	良好	底部 1/5	外周縁部 一部腐食	
11	甕	(7.8)	(3.3)	5YR7/6 焼	密 (1mm 以下の黒・赤色粒わずかに含む)	良好	胴部へ肩部 1/4	腐食	
12	甕	3.0	(1.3)	7.5YR7/4 におい焼	密 (1mm 以下の黒・赤色粒含む)	良好	底部完形	底面腐食	
13	甕	(8.0)	(2.3)	10YR5/3 に近い黄焼	密 (0.5mm 程度の長石わずかに含む)	良好	底部 1/5	内面酸化	
14	高坏	(-)	(2.9)	5YR6/0 焼	密 (0.1mm 以下の長石・赤色粒わずかに含む)	良好	頸部ほぼ完全	器しに磨滅 3方向に円孔	
15	高坏	(-)	(4.3)	7.5YR7/4 におい焼	やや密 (1mm 程度の長石多く含む)	良好	頸部 2/3	外周縁部	
16	甕	(7.2)	(4.4)	5YR6/4 におい焼	やや密 (1mm 程度の長石多く含む)	良好	口縁部 1/5	内面被膜により赤変 縁部欠	
17	8字壺	(17.2)	(3.1)	7.5YR6/6 焼	密 (0.1mm 以下の長石・黒粒少し含む)	良好	口縁部 1/5	外周一部酸化	
18	坏	(13.4)	(2.9)	5YR6/6 焼	密	良好	口縁部 1/5		
19	坏	(13.6)	3.9	8.75YR5/2 におい焼内 Ni 点	密	良好	口縁部 1/4	底部完形	
20	鉢			7.5YR5/3 におい焼	密 (0.1mm 程度の長石・黒色粒わずかに含む)	良好	口縁部 1/5		
21	甕	(15.4)	(1.4)	7.5YR7/4 におい焼	密 (0.1mm 程度の黒色粒含む)	良好	口縁部 1/5	赤変あり	
22	甕	(6.6)	(5.3)	7.5YR7/6 焼	密 (0.1mm 程度の赤色粒わずかに含む)	良好	口縁部一部 1/5	磨滅小さい	
23	8字壺	(14.4)	(2.7)	2.5YR6/6 焼	密 (0.1mm 以下の長石・黒粒わずかに含む)	良好	口縁部 1/5		
24	甕	(-)	(3.3)	7.5YR6/4 におい焼	密 (1mm 以下の長石・黒色粒少し含む)	良好	頸部上半ほぼ完全		
25	甕			10YR4/2 淡黄焼	密 (1mm 以下の長石・0.1mm 以下の黒粒少し含む)	良好	小片	外赤変	
26	8字壺	(8.2)	(3.3)	7.5YR5/4 におい焼	密 (0.1mm 程度の長石・黒粒少し含む)	良好	頸部 1/5		
27	高坏	(-)	(3.1)	6YR6/6 焼	やや密 (1mm 程度の長石多く含む)	良好	頸部ほぼ完全	一方の内面 円孔残る	
28	甕	(17.8)	(7.2)	7.5YR7/6 焼	やや密 (1mm 以下の黒色粒多く含む)	良好	口縁部一部 1/4		
29	甕	(8.4)	(1.8)	10YR7/3 に近い黄焼	やや粗 (1mm 程度の黒色粒多く含む)	良好	底部 1/4	本底面あり	
30	甕	(10.2)	(2.8)	7.5YR7/6 焼	やや密 (1mm 以下の黒色粒多く含む)	良好	底部 1/4	本底面あり	
31	甕	(6.4)	(2.7)	5YR6/4 におい焼	密 (0.1mm 以下の長石少し含む)	良好	底部 1/5	底面縁部により腐食	
32	8字壺	(-)	(3.0)	5YR6/6 赤赤焼	やや密 (1~2mm 程度の長石・0.5mm 程度の黒粒含む)	良好	頸部上半完形	内面酸化	
33	甕			7.5YR6/4 におい焼	密 (1mm 程度の長石含む)	良好	小片	外周一部酸化 濁川式か?	
34	二重口縁壺			7.5YR6/3 におい焼	密 (1mm 程度の長石含む)	良好	小片	赤変あり	
35	甕			2.5Y6/3 におい黄	密 (0.1mm 以下の長石・黒粒わずかに含む)	良好	小片	底面モミ状に酸化 外周黒変	
36	平づくね土器	2.4	(3.1)	10YR5/4 におい黄焼	密	良好		底面モミ状に酸化 外周黒変	
37	土甕	(6.5)	(2.4)	10YR5/1 焼灰	密 (0.1mm 以下の長石わずかに含む)	良好	底部 1/4	外周一部酸化・割綻	
38	甕	(10.8)	(3.05)	10YR6/3 におい黄焼	密	良好	底部 1/5	本底面	
39	甕	(4.2)	(2.2)	7.5YR6/6 焼	密 (1mm 以下の長石少し含む)	不良	底部 1/3	本底面	
40	甕	(6.8)	(5.7)	7.5YR7/4 におい焼	密 (1mm 以下の長石・黒粒含む)	良好	口縁部 1/4	内外面の一部酸化	
41	甕	(17.0)	(5.3)	5YR6/6 焼	密 (1mm 以下の長石少量含む)	良好	口縁部 1/5		
42	甕	(17.0)	(5.0)	7.5YR5/4 におい焼	密 (2mm 以下の長石・1mm 以下の黒色粒少量含む)	良好	口縁部 1/3		
43	甕	(16.0)	(5.1)	7.5YR6/4 におい焼	密 (1mm 以下の長石・黒色粒少量含む)	良好	口縁部 1/5	内面一部酸化	
44	坏	(17.0)	(3.0)	10YR6/3 におい黄焼	密 (0.1mm 程度の長石わずかに含む)	良好	口縁部 1/5	赤変あり	
45	坏	(14.6)	(3.7)	5YR6/6 焼	密	良好	口縁部一部 1/5	一部腐食 西野河系	
46	坏			5YR7/6 焼	密 (1mm 以下の黒色粒少し含む)	良好	小片	腐食	
47	8字壺	(8.0)	(3.1)	7.5YR6/4 におい焼	密 (0.1mm 程度の長石・黒粒含む)	良好	頸部 1/5		
48	高坏	(-)	(4.9)	7.5YR6/6 焼	密 (1~2mm 程度の長石・1mm 程度の赤色粒少し含む)	良好	環底部一部ほぼ完全	外周赤変	
				計測値 (mm, g)					
番号	種別	材質	長さ	幅	厚	重さ	備考		
49	鉄剣		6.6	1.1	1.1	(6.6)			
50	管玉	緑泥片類	1.5	0.6	1.1	0.9			

表6 須臾器観察表

番号	器種	計測値 (mm)		色調	胎土	地衣	保存状況	備考
		口径・底径	高さ					
1	皿			N5/灰	密	良	口縁部小片	
2	坏蓋			外 10Y4/1 灰 胎 5YR4/3 に近い赤褐色	密	良	小片	外面自然釉付着
3	甕又は甔			2.5Y5/1 黄灰	密 (0.1mm 以下の長石わずかに含む)	硬良好	小片	
4	甕又は甔			5Y6/1 灰	密 (0.1mm 以下の長石・黒色粒わずかに含む)	良		外面自然釉付着
5	甕又は甔			5Y6/1 灰	密 (0.1mm 以下の長石・黒色粒わずかに含む)	硬良好		
6	皿			外 10YR5/1 灰 胎 5YR5/3 に近い赤褐色	密	良		
7	甕又は甔			5Y5/1 灰	密 (0.1mm 程度の長石わずかに含む)	硬良好		
8	甕又は甔			10Y5/1 灰	密 (0.1mm 以下の長石わずかに含む)	良		
9	甕又は甔			N4/ 灰	密 (0.1mm 程度の長石わずかに含む)	硬良好		
10	甕又は甔			5Y4/1 灰	密 (0.1mm 程度の長石わずかに含む)	硬良好		
11	皿			N5/ 灰白	密	硬良好	小片	埋没度?
12	甔			外 N3/ 黄灰 胎 5YR4/3 に近い赤褐色	密 (1mm 以下の長石少し含む)	良		外面自然釉付着
13	皿			外 N5/1 灰 胎 2.5YR5/3 に近い赤褐色	中や密 (1mm 程度の黒石多く含む)	良		
14	甕又は甔			5G4/1 緑オリーブ灰	密 (0.1mm ~ 5mm 程度の長石わずかに含む)	硬良好		
15	甕又は甔			5Y7/1 灰白	密	硬良好		
16	甕又は甔			外 N4/ 灰 胎 2.5YR4/2 灰赤	密	良		外面自然釉付着 大きくひずみんでいる
17	甕又は甔			外 N4/ 灰 胎 5YR5/2 灰褐色	密 (0.1mm 程度の長石少し含む)			'16 と同一個体か
18	甕又は甔			外 10Y4/1 灰 胎 7.5YR5/2 灰褐色	密	良		外面自然釉付着
19	甕又は甔			5Y2 灰白	密 (1mm 以下の長石少し含む)	良		
20	甕又は甔			5Y5/1 灰	密 (1mm 以下の長石・黒色粒わずかに含む)	量		内面自然釉付着
21	甔			5Y5/1 灰	密 (1mm 以下の長石・黒色粒わずかに含む)	硬良好		外面自然釉付着
22	甕又は甔			7.5Y6/1 灰	密 (0.1mm 以下の長石わずかに含む)	硬良好		内外面自然釉付着
23	甕又は甔			5Y4/1 灰	密 (1mm 以下の長石わずかに含む)	良		外面自然釉付着
24	甔	(9.0)	(1.1)	10YR5/1 灰	密	硬良好	裾部 1/8	外面自然釉付着
25	甕又は甔			5Y6/1 灰	密 (2mm 以下の長石わずかに含む)	良		外面自然釉付着
26	甔			5Y6/1 灰	密 (0.1mm 程度の長石わずかに含む)	硬良好		
27	甕又は甔			5Y5/1 灰	密 (1mm 以下の長石わずかに含む)	硬良好		外面自然釉付着
28	皿	(-)	(7.2)	2.5GY6/1 オリーブ灰	密程度	硬良好	裾部 1/4	外面自然釉付着
29	甔			N3/ 黄灰	密 (0.1mm 以下の長石わずかに含む)	硬良好		内外面自然釉付着
30	坏	(10.6)	(2.0)	外 N4/ 灰 胎 2.5YR4/2 灰赤	密 (0.1mm 以下の長石わずかに含む)	良	口縁部 1/8	
31	甕又は甔			5Y6/1 灰	密 (0.1mm 程度の長石・黒色粒わずかに含む)	硬良好		
32	甕又は甔			N5/ 灰	密 (0.1mm 程度の長石少し含む)	硬良好		
33	甕又は甔			7.5Y5/1 灰	密 (1mm 以下の長石わずかに含む)	硬良好		外面自然釉付着
34	甔			5Y4/1 灰	密 (2mm 以下の長石少し含む)	硬良好		外面自然釉付着
35	甕又は甔			5Y7/1 灰白	密	良		
36	甕又は甔			7.5Y4/1 灰	密 (1mm 以下の黒色粒少し含む)	硬良好		外面自然釉付着
37	甕又は甔			10Y5/1 灰	密 (1mm 以下の長石少し含む)	硬良好		内面自然釉付着
38	甕又は甔			N5/ 灰	密 (0.1mm 以下の長石・1mm 以下の黒色粒少し含む)	硬良好		

表7 かわらけ観察表

番号	種類	色調	計測値 (cm)			保存率	備考
			口徑	底径	高さ		
1	かわらけ	75YR6/4 にぶい雫		(5.4)	(2.2)	底部 1/4 以下	内面著しく磨滅
2	かわらけ	75YR6/6 雫		(6.2)	(1.2)	底部 1/2	内外面ともに磨滅
3	かわらけ	75YR7/6 黄雫		(6.2)	(2.2)	底部 1/3	内外面ともに少し磨滅
4	かわらけ	75YR5/6 明雫		(5.6)	(1.6)	底部 1/4 以下	
5	かわらけ	75YR7/6 雫	(8.8)	(5.8)	1.8	底部 1/3、口縁部 1/4 以下	
6	かわらけ	75YR6/4 にぶい雫	(7.4)	(3.6)	1.6	口縁部 1/4 以下	
7	かわらけ (柱状高台)	75YR6/6 雫		(9.4)	(4.3)	底部 1/4	外周少し磨滅
8	かわらけ	75YR7/6 雫		(7.0)	(2.3)	底部 1/4 以下	
9	かわらけ	75YR6/6 雫	(7.8)	(5.8)	1.6	2/3	
10	かわらけ	75YR5/4 にぶい雫				口縁部 1/4 以下	
11	かわらけ (手づくね)	2.5YR2 灰白				口縁部 1/4 以下	
12	かわらけ	75YR8/4 淡黄雫	(14.2)	(5.6)	2.4	底部 1/2、口縁部 1/4	内外面ともに著しく磨滅
13	かわらけ	10YR8/4 淡黄雫	(12.4)	(4.6)	2.8	1/4	
14	かわらけ (灯明皿)	10YR8/3 淡黄雫	(8.8)	(2.0)		底部 1/4 以下	内外面に油煙付着
15	かわらけ	10YR8/4 淡黄雫	(15.4)	(9.0)	2.3	底部 1/3、口縁部 1/4 以下	
16	かわらけ	10YR7/4 にぶい黄雫		(4.6)	(2.3)	底部 1/2	
17	かわらけ	10YR8/4 淡黄雫		(9.4)	(1.2)	底部 1/3	内外面ともに少し磨滅
18	かわらけ	75YR6/6 雫	(6.6)	(4.4)	2.9	1/2	
19	かわらけ	75YR6/6 雫		(5.0)	(1.7)	底部 1/4 以下	内外面ともに少し磨滅
20	かわらけ	75YR6/6 雫		(7.2)	(1.4)	底部 1/2	
21	かわらけ	75YR6/6 雫		(6.6)	(1.6)	底部 1/3	
22	かわらけ	75YR8/4 淡黄雫	(8.4)	(1.7)		底部 1/4	内外面ともに少し磨滅
23	かわらけ	10YR8/4 淡黄雫	(7.6)	(1.2)		底部 1/3	
24	かわらけ	75YR6/6 雫	(4.0)	(1.1)		底部ほぼ消失	内外面ともに磨滅
25	かわらけ	75YR6/3 にぶい雫				口縁部 1/4 以下	内面磨滅
26	かわらけ	75YR7/4 にぶい雫		(5.2)	(1.5)	底部 1/4 以下	
27	かわらけ	5YR6/6 雫	(11.6)	(7.0)	3.5	底部 2/3、口縁部 1/4 以下	
28	かわらけ	75YR6/6 雫		(5.2)	(2.4)	底部 2/3	
29	かわらけ	75YR6/6 雫	(13.6)		(3.3)	口縁部 1/4	内外面ともに少し磨滅
30	かわらけ (柱状高台)	75YR6/6 雫		(5.2)	(3.8)	底部ほぼ消失	内外面ともに磨滅
31	かわらけ	75YR5/4 にぶい雫		(6.4)	(3.9)	底部 1/2	内外面ともに少し磨滅
32	かわらけ	75YR6/4 にぶい雫		(4.4)	(1.8)	底部 2/3	内外面ともに磨滅
33	かわらけ	10YR8/3 にぶい黄雫		(6.2)	(1.5)	底部 1/2	内外面ともに著しく磨滅
34	かわらけ	10YR6/6 明黄雫	(6.0)	(2.6)		底部 3/2	内外面ともに著しく磨滅
35	かわらけ	5YR5/6 明赤雫	(6.6)	(2.7)		底部 1/4 以下	底部に接合痕あり
36	かわらけ	75YR7/6 雫	(6.6)	(2.2)		底部 1/4 以下	
37	かわらけ	75YR5/6 明雫	(5.8)	(1.3)		底部 1/3	
38	かわらけ	75YR6/6 雫	(6.6)	(2.2)		底部 1/2	
39	かわらけ	5YR7/4 にぶい雫	7.2	4.4	1.7	口縁部一部欠け	
40	かわらけ	75YR7/6 雫	(7.2)	(4.0)	2.0	1/2	
41	かわらけ	75YR5/6 明雫	(4.6)	(1.7)		底部 1/3	
42	かわらけ (灯明皿)	75YR6/6 雫	(2.8)	(1.6)		底部 1/2	内外面に油煙付着
43	かわらけ	75YR6/6 雫	7.4	4.0	1.5	消失	
44	かわらけ	75YR8/4 淡黄雫	(13.4)	(8.0)	2.4	1/4 以下	
45	かわらけ	10YR7/4 にぶい黄雫	(12.2)		(1.8)	口縁部 1/3	

表8 中世陶磁器観察表

番号	種別	器種	産地	年代	計測値 (mm)				保存状況	胎質	備考 (文様等)
					口径	底径	高さ	その他			
1	陶器	熊形香炉	瀬戸・美濃	大藏2				器厚0.5	口縁部一部	鉄胎	割れた後に被胎
2	灰胎陶器	碗	在胎	H22 後半		(7.0)	(2.7)		底面1/8		
3	瓦質土器	火鉢					(2.6)		底面小片		鈔付
4	磁器	面取皿	中国	15C後半	(8.0)	3.6	9.3		口縁1/8、底面1/2	白磁	内面全面施釉、底面露胎、重ね積り痕あり B群
5	陶器	天目茶碗	瀬戸・美濃	徳川古	(12.0)		(4.0)		口縁部1/8	鉄胎	
6	陶器	縁飾小皿	瀬戸・美濃	徳川新	(9.8)	(4.2)	2.0		底面2/3、口縁部1/4	灰胎	貫入あり 口縁部内外施釉
7	陶器	漆鉢	瀬戸・美濃	徳川新				1.2	胴部一部	鉄胎	内外全面施釉
8	磁器	梅瓶	中国					器厚0.3	胴部一部	青白磁	貫入あり
9	磁器	碗	中国臨泉	13C中葉				器厚0.3	口縁部一部	青磁	墨分文様 B1類
10	陶器	甕	常滑					器厚0.9	胴部一部	自然釉	押印文 内外施付層
11	陶器	甕	常滑	5型式	(23.8)		(8.6)		口縁部1/8		
12	陶器	鉢	常滑	6型式		(16.4)	(5.2)		底面1/8		
13	陶器	天目茶碗	瀬戸・美濃	後江		(4.0)	(2.7)		底面残存	鉄胎	内面全面施釉、外面露胎
14	陶器	毎日付大皿	瀬戸・美濃	後江				器厚0.7	口縁部一部	鉄胎	口縁内外施釉 内面赤色顔料付層
15	陶器	天目茶碗	瀬戸・美濃	徳川新	(12.0)	4.4	6.6				鉄胎
16	陶器	漆鉢	瀬戸古	後江新益		(11.8)	(3.3)		底面1/4		
17	陶器	甕	常滑			(20.0)	(5.7)		底面1/8		
18	瓦質土器	火鉢					(5.3)		胴部小片		
19	磁器	皿	中国	15C後半	(6.8)		(1.2)		底面1/4	染付	B1群
20	磁器	皿	中国	15C後半~ 15C初葉	(5.0)		(1.9)		底面1/3	染付	C群
21	陶器	甕瓶	瀬戸・美濃	大藏			(1.8)		底面一部	鉄胎	底面露胎
22	陶器	梅瓶	瀬戸・美濃	大藏2	(9.4)	2.3	5.2		口縁部一割欠	灰胎	貫入あり 内外全面施釉 底面外周トチン線 内面赤色顔料付層
23	陶器	磁碗	瀬戸・美濃	大藏2	(11.2)	(6.6)	2.4		1/2	鉄胎	内外全面施釉、底面内外共にトチン線
24	陶器	毎日付大皿	瀬戸・美濃	徳川古				器厚0.6	口縁部一部	灰胎	内外全面施釉、鉄胎
25	陶器	漆鉢	瀬戸・美濃	大藏		(5.0)	(2.8)		底面一部	鉄胎	内外施釉
26	陶器	漆鉢	瀬戸・美濃	大藏				器厚1.5	底面一部	鉄胎	内外施釉
27	陶器	漆鉢	瀬戸・美濃	大藏2				器厚0.9	口縁部一部	鉄胎	内外施釉
28	陶器	鉢	常滑	4型式		(4.5)			底面1/4	自然釉	内面露胎
29	陶器	鉢	常滑	7型式				器厚1.0	口縁部一部		
30	磁器	碗	中国臨泉	15C中葉				器厚0.5	口縁部一部	青磁	貫入あり 墨分文 B3類
31	磁器	碗	中国	12C				器厚0.5	口縁部一部	白磁	貫入あり 外周露胎 厚胎
32	陶器	甕	常滑					器厚1.3	胴部一部	自然釉	押印文
33	陶器	鉢	常滑	11型式				器厚1.1	口縁部一部	灰胎	
34	陶器	甕	常滑					器厚1.1	胴部一部		押印文
35	陶器	甕	常滑					器厚0.8	胴部一部	自然釉	
36	陶器	甕	常滑					器厚1.1	胴部一部	自然釉	
37	山系陶	碗			(4.6)	(1.5)			底面1/2		
38	陶器	天目茶碗	瀬戸・美濃	徳川古		4.0	(1.6)		底面残存	鉄胎	内面全面施釉、底面露胎
39	山系陶	碗			(7.8)	(3.3)			底面1/8	自然釉	
40	山系陶	碗					(2.3)		底面1/8	自然釉	
41	陶器	甕	常滑	3型式				器厚1.0	口縁部一部	自然釉	内外周一部露胎
42	陶器	鉢か	常滑					器厚1.0	底面一部		
43	陶器	甕	常滑					器厚1.2	底面一部	自然釉	押印文

表9 銭貨観察表

番号	銭名	計測値				材質	初鋳年代 (西暦)	分類	備考
		外径 (cm)	穿 (cm)						
			縦	横	重さ (g)				
1	開元通宝	2.40	0.72	0.68	2.1	銅	621		
2	天禧通宝	2.54	0.64	0.64	3.2	銅	1018		
3	皇宋通宝	2.54	0.62	0.61	2.1	銅	1039		
4	皇宋通宝	2.49	0.71	0.73	2.6	銅	1039		
5	皇宋通宝	2.46	0.67	0.67	2.2	銅	1039		
6	元豐通宝	2.41	0.64	0.66	3.0	銅	1078		
7	元豐通宝	2.31	0.68	0.67	1.6	銅	1078		
8	皇宋元宝	2.50	0.68	0.68	2.3	銅	1253	皇背 二	
9	洪武通宝	2.29	0.51	0.50	3.3	銅	1368	宝背 銭	
10	洪武通宝	2.32	0.54	0.54	3.5	銅	1368	洪背 平	
11	洪武通宝	2.28	0.57	0.58	3.5	銅	1368		
12	永楽通宝	2.50	0.57	0.58	3.1	銅	1408		
13	永楽通宝	2.50	0.57	0.58	2.3	銅	1408		
14	天聖元宝?				0.4		1023?	3/4 欠損 元の文字あり	

表10 鉄製品・その他観察表

番号	器種	材質	出土地点	計測値 (cm)			備考
				長さ	幅	重さ	
1	釘	鉄	確認調査	8.9	0.8	26.2	頭部・先端欠損
2	釘	鉄	確認調査	10.4	0.65	13.4	先端欠損
3	釘	鉄	柱列1-4	5.7	0.65	8.5	頭部欠損
4	釘	鉄	遺構外	5.8	0.35	2.6	頭部欠損
5	釘	鉄	堀7	4.3	0.7	3.3	頭部・先端欠損
6	釘	鉄	堀3	3.8	0.65	3.6	頭部・先端欠損
7	釘	鉄	土坑14	4.3	0.35	2.7	ほぼ完存
8	釘	鉄	堀6	2.6	0.7	3.8	先端欠損
9	釘	鉄	堀3	2.0	0.4	1.4	頭部・先端欠損
10	鉄	鉄	柱列1-4	2.3	0.45	3.4	ほぼ完存
11	刀子	鉄	土坑12	6.2	1.5	12.2	先端・茎欠損
12	刀子	鉄	井戸3	6.1	1.3	14.5	先端・茎欠損
13	刀子	鉄	確認調査	3.1	1.65	3.7	先端のみ残存
14	不明	鉄	堀7	2.8	2.8	5.7	完存
15	不明	不明	堀6	2.7	0.9	1.8	一部欠損
16	ブラシ	獣骨	遺構外	(9.2)	1.2		頭部欠損
17	基石		堀6		図に記載		完存
18	土製円盤		表探	4.3	4.4	厚1.3	土師器再利用品

写真図版



1. 遺跡遠景



2. 調査区北側（完掘）



3. 調査区南側（完掘）



1. 竪穴 23 全景



2. 竪穴 23 カマド



3. 竪穴 25 全景



1. 堀3・6重複状況



2. 堀3全景



3. 堀6全景

1. 堀 7 全景



2. 竖穴 24 疎出土状況



3. 竖穴 24 完掘





1. ピット群



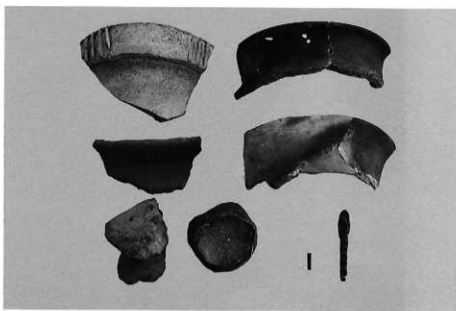
2. 井戸3



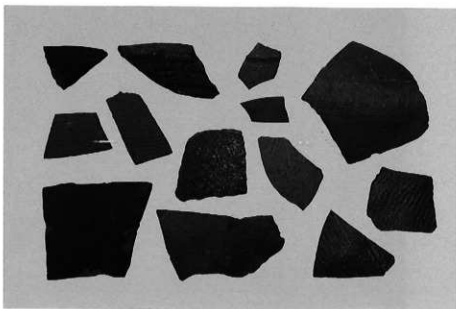
3. 焼土と炭化米散布地



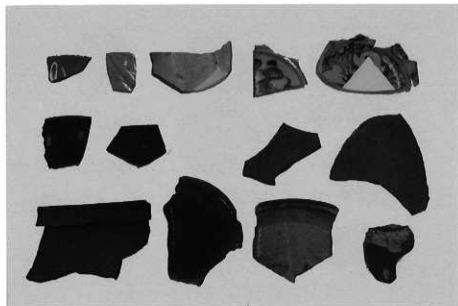
1. 古墳時代遺物 1



2. 古墳時代遺物 2



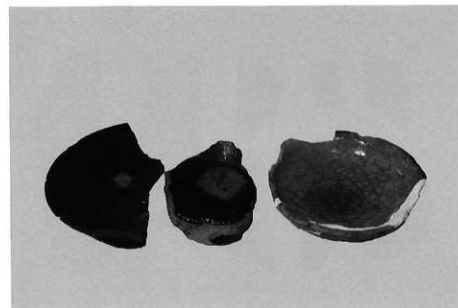
3. 須恵器



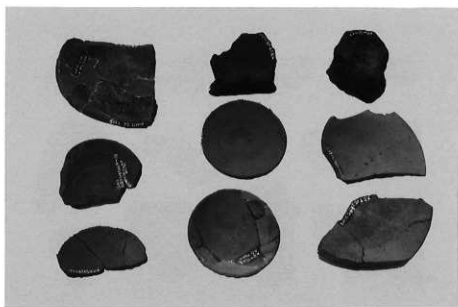
1. 中世陶磁器



2. 堀3出土天目茶碗



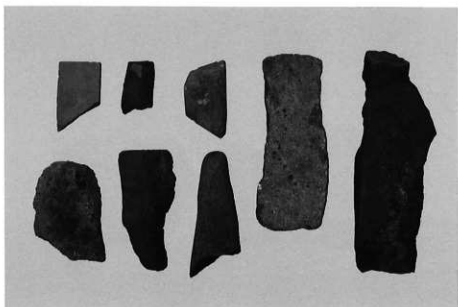
3. 瀬戸・美濃産陶器



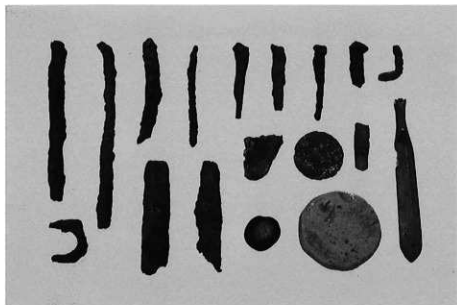
1. かわらけ1



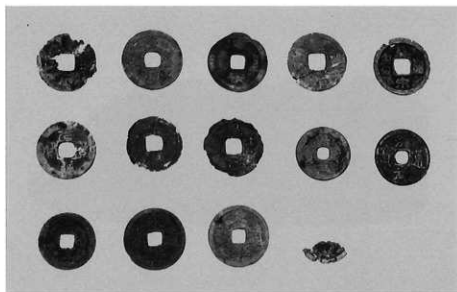
2. かわらけ2



3. 砥石



1. 鉄製品とその他



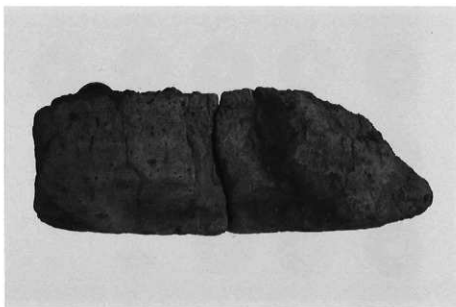
2. 銭貨



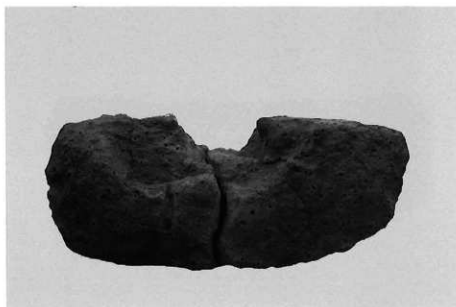
3. 不明石材1



1. 不明石材1のノミ跡



2. 不明石材3(上から)



3. 不明石材3(正面)

報告書抄録

ふりがな	もとふじだいぐうじやかたあとに							
書名	元富士大宮司館跡Ⅱ							
副書名	大宮城跡にかかわる埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	富士宮市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第48集							
編著者名	保竹貴幸、馬飼野行雄、細田和代、五味奈々子							
編集機関	富士宮市教育委員会							
所在地	〒418-8601 静岡県富士宮市弓沢町150 ℡0544-22-1111(代)							
発行年月日	西暦2014年3月20日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
大宮 城跡	富士宮市 元城町 1060-4	22207	市番号 127 県番号 富士宮市 32	35° 13′ 32″	138° 36′ 49″	20120925 } 20130128	480 m ²	療育支援セ ンター建設 に伴う発掘 調査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
大宮城跡	散布、集落、 城館	古墳、中世		竪穴住居、堀、 土坑		土師器・須恵 器・中世国産 陶器・貿易陶 磁器・かわら け・石製品・ 金属製品ほか		

富士宮市文化財調査報告書 第48集

元富士大宮司館跡Ⅱ

—大宮城跡にかかわる埋蔵文化財調査報告書—

平成26年3月20日

編集 富士宮市教育委員会

発行 富士宮市教育委員会

〒418-8601

静岡県富士宮市弓沢町150

(0544) 22-1111(代)

印刷 髙きうちいんさつ

〒418-0015

富士宮市舞々木町70

(0544) 27-4055(代)